

平成19年度大阪商業大学商業史博物館シンポジウム
「巡る祈りの文化」
世界遺産にみる信仰・巡礼・芸能

基調講演

「信仰・巡礼・芸能」

三重大学名誉教授 酒 井 一

報 告

「宗教の身体性と根源性」

天台寺門宗教学部長・ 福 家 俊 彦
総本山三井寺執事

「四天王寺と熊野 熊野街道が結んだ二つの聖地」

大阪城天守閣研究副主幹 北 川 央

「立ち枯れる世界遺産の森・大峰山脈」

大阪経済法科大学教授 前 圭 一

パネルディスカッション

コーディネーター 酒 井 一

パネリスト 福 家 俊 彦

北 川 央

前 圭 一

(順不同・敬称略)

平成19年10月13日(土) 13:00~17:00

大阪商業大学 4号館4階 411教室

司会 それでは定刻となりましたので、平成十九年度大阪商業大学商業史博物館シンポジウムを開催させていただきます。この世界遺産関連のシンポジウムは今年で三回目になりまして、一回目からご出席いただいている方も多いかとは思いますが、一回目は「紀伊山地の祈りと生活」、二回目は「紀伊山地の自然への祈り」ということで、「紀伊山地」を冠に付けて行ってききました。三回目の今回は「巡る祈りの文化」ということで、世界文化遺産の中の一定の文化の内容に焦点をあてたお話をぜひ聞きたいというふうに考えています。

基調講演の酒井先生は一回目から出ていただいておりますので皆さんもよくご存じかと思いますが、今回は新たに三名の講師の先生をお招きいたしました。天台宗寺門の総本山であります三井寺の福家俊彦先生、大阪城天守閣の研究副主幹の北川央先生、それから、大阪経済法科大学の前圭一先生のお三方でございます。

それでは、開催に先立ちまして、まず当館の館長の中野のほうからひとことあいさつをさせていただきます。

開会あいさつ

中野 先ほど紹介がありましたように、今回で第三回目のこのテーマを巡るシンポジウムということですが、たぶん皆さん方の中には前回もご参加の方がかなりおられるのではないかとこのように思います。大変好評でありまして、しかも、対象が大変大きくて、それだけ問題があるものがあるものから、第三回目を企画いたしました。

講師の先生方は、基調講演をいただく酒井先生以下、皆、一流の方ばかりです。大変期待が持てると思います。楽しみにしていただきたいのですが、ただ、実はこのシンポジウムはもう一つのシンポジウムと鉢合わせになって、僕も実はそちらのほうへ出る義務があるのですが、中身を見ますとこちらのほうはるかに面白そうで、実は、昨日まではそちらのほうに出るつもりだったのですが、急ぎよ、今日、向こうのほうはサボってこちらのほうへ出ようというふうに思っています。

ただ、一つだけお話ししておかなければいけないのは、そちらのほうに会場として「蒼天」を取られました。ですから、皆さんは学生が利用する教室になってしまったわけです。座り心地が大変悪いと思いますけれども、学生時代に返ったと思われるので、そしてご辛抱いただければというように思います。そのかわり、中身は大変充実したお話が聞けるのではないかと思います。それでは、酒井先生、よろしくお願いいたします。

基調講演

「信仰・巡礼・芸能」

酒 井 一
 (三重大学名誉教授)

締合同会 皆さん、よくご存じかと思うのですが、念のためにもう一度ご紹介させていただきます。酒井先生は一九三一年にお生まれになりまして、京都大学大学院文学研究科国史学専攻博士課程を修了されまして、龍谷大学、三重大学、天理大学、奈良大学の教授を歴任されて現在に至られておられます。それでは酒井先生、どうぞよろしくお願いいたします。**酒井** それでは失礼いたします。今日は、予定では五時に終了するつもりでしたけれども、途中に説経浄瑠璃のテープが入ります。少しでもカットすると迫力がなくなりますので、すみませんが、四〇分丸々お聞きいただきます。そのために終了時刻が五時十分ぐらいになるかと思えますので、ご了承いただきたいと思えます。はじめに、全体にわたることを少しお話をさせていただきます。

この企画は、紀伊山系を中心にした熊野、高野山、大峰などの世界遺産登録を我々がどのように受け止めていくかということでシンポジウムを始めまして、今回三回目になります。それで、世界遺産というのはいったい何なのかということも、もう過去二回でいただいたお話をしているつもりです。あるいは、皆さんはNHKでの番組で映像、あるいは解説でよくご存知かと思えますが、この世界遺産を持つことによって、世界と、とりわけ我々日本が何を考えているのかということ、何を引き継ぐべく、何を伝えようとしているのか。それを単なる古いお寺があるとか、古いお宮さんがあるとかということだけで取り上げてもらっては困ると思うのです。もっと長い伝統の上に立つて考えるべきではないかということです。奈良県辺りはずいぶん早くから、東大寺とか法隆寺とか立派なお寺がございますので、世界遺産として世界に冠たるものになると思いますが、それ以外のものも含めていろいろ考えたいと思います。

私の非常に関心のある世界遺産といえますのは、一つは広島島の原爆ドームです。それから、同じ頃に歴史的な問題を提起したポーランドのアウシュビッツ収容所です。このことを抜いて、我々が世界遺産を考えることは間違いに近いと私は思います。つまり、ユネスコは「世界

の文化と平和」ということを願いながらこの登録をしているのです。そして、過去の人類がつくり上げて、そして、その遺産に基づいて、今日、あるいは未来に引き継ぐべきものは何であるかということをお教えているのです。そうでなければ、国連の機関がこういう文化的なことをする意味はないわけです。ですから、今まで私は「原爆ドームを忘れるな」と、チェコスロバキアの建築家が造った建築を忘れるなど言うのと同じ時に、ポーランドのアウシュビッツ、この問題を念頭において我々は歴史を考えなければならぬと思います。過去を過去のものとして考えないということでありませう。過去から我々が何を引き継ぐかということなのです。

そこで、一つは、近代文明というのはいったい何なのか。このことは、今、問われていると思うのです。今、イラクでアメリカが戦争をしていますけれども、そこで問われているのは「文明というのは何であるか」ということです。あれは単なるアメリカとイラクとのテロをめぐる問題ではないと思います。ブッシュさんはイラクに対して非文明国だと言いました。野蛮国である。野蛮国であるから、九・一一のような野蛮なことをしたから、ペナルティーを科して攻撃したということなのです。こうなってきましたと、近代文明というのはいったい何なのか。アメリカが近代文明なのかということをお、我々は問われているのです。

文明というのは、広く大きな目で見ると、人類は、自然を変えることによって発展してきました。ところが、自然にも臨界点があるわけです。「臨界」という言葉をお聞きになったことはございますか。つまり、原子炉で「臨界」と言うでしょう。あれは、日本語では「臨界」という言葉で表現していますけれども、危機状態だということなのです。人間が死ぬときに「臨界的に病む」と、危篤のことをイル・クリティカルリ(critically)と言います。そして、臨界のことをクリティカルリ(critically)ということなのですけれども、つまり、人間が死ぬときもクリティカルだ。原子炉がクリティカルになっていることを「臨界」と物理学は呼んでいるわけですね。そして、今、世界は臨界状態にあります。そうなってきましたと、我々はいっぺん「文明というのはいったい何なのか」を考える必要があります。特に近代文明の在り方です。

私は世界遺産を見るたびに、ユネスコがいろいろな宗教の違いとか社会構造の違いを越えて守り継承しようとしていることは、これは尊いものだと思います。考え方が違う、イデオロギーが違うから、文明のあり方が違うから相手を攻撃してよいということにならないわけです。そのことを、私は世界遺産を考えるといつも思うわけです。とても古いものがあつたらいいというものだけではないと思います。

そう考えてきますと、例えば、今日、この教室の電気をすべて消してしまふ。消すことによって、我々は外の物を見ずに自分に直面します。そこで初めて見えるものがあります。明かりがあるから見えるものと、明かりがあるから見えないものを我々は持っています。こういう哲学がほしい。とくに日本人は、私ははなはだ哲学を喪失していると思います。

タイに行ったことがあるのですが、アジア・太平洋戦争時に日本が強行建設した泰緬鉄道という、タイとビルマ（ミャンマー）間の鉄道の調査に行きましたときに、タイの人が私に向かって「日本人は Money, Money だ」と言っているのです。金だけできたのか？」。そうすると、付いていた日本人の元軍隊付きの英語の通訳の方が「いや、この先生は金のために来たのではない。タイとビルマの間に築いた鉄道に、どれだけの、当時の言葉で言うと『原住民』を殺して、そして、捕虜になったイギリス、オーストラリア、オランダの兵隊を使って死に至らしめたのか、それを調べに来ているので、よく協力してあげてください」と言われたわけです。

そして、ちょうど行っているときに、カンチャナブリというところの県庁の敷地を掘っていたら人骨が出てきて、それは泰緬鉄道の犠牲者だったのです。私は、あまり骨に対しては抵抗感はないです。なぜかあまり抵抗はないので、それを触ったら土地の人から抗議の声があがりました。つまり、「あなた方の先輩が殺した人の骨を簡単に触っている」と。そうしたら、また通訳が入りまして、「この人は考古学者だ。人類学のために調査しているので、モノとして扱っていません」と言ってくれたのです。それで助かったわけですが、なかなか過去は消えませんが。

そういうことからしますと、元に戻りますと、我々は Money だけの、モノだけの時代に生きていてはいません。つまり、哲学が必要なの。その哲学とはいったい何なのか、これをちょっと今日のテーマの中で考えたいと思います。なぜ信仰が必要であり、なぜ巡礼して、なぜ芸能が必要だったのか、これらはすべて哲学であります。単に多くの人が参詣したという問題ではないと私は思います。それを前近代の世界でどう考えていくかということをお問われていると思います。

私自身も、顧みると、絶えず何かモノだけを追いかけていて、座って自分を見詰めたりはほとんどありません。電車の中を見てご覧下さい。大半は携帯電話でメールを読んでいるでしょう。昔は日本人は本を読んでいるか居眠っているかだったのですが、このごろ居眠る人はどうでしょうか。ただ、朝から居眠っている日本人が大量に増えたことは間違いないと思います。ところが、夕方になると、十人のうち四人、五人まで携帯の画面を読んでいますよ。こういう社会の中で何が出てくるのかです。

黙って、悠然と座っていることが日本人はできないようです。私はイギリスでちょっと生活をしたことがあるのですが、イギリスの地下鉄に乗りますと、目をじっと前を向けて座っている人が圧倒的です。何もしない、居眠りもしない。他は新聞か本を読んでいる。これだけです。今はずいぶん変わってきたと思いますが、ところが日本人がじっと、何もせずに座っているということはあり得ないです。ほとんど何かを探す。私自身も、カバンを開けたり閉めたり、ときどき定期入れを出して中身をみたり。さもないと本を読んでいます。ですから、こういう状態と

は何なのか。これから本論に入ります。

ちょっと前置きが長くなりましたが、今日お話しする時代は、もう電気も何もないとみてください。医者もいません。こういう、絶対的な自然の中で人が生きていく。お手元のプリントに「中世を生きる」という題を掲げましたが、このあと江戸時代になるとだいぶ世の中が変わってくるのです。ですから、江戸時代は戦争がなかったために、楽しみながらの参詣、長い旅が出来たのです。内乱もなければ、外からも攻めてくることがない。だから、ゆつくり多くの人たちが寺社参詣をしているわけです。ところが、時代を1ページ前へ持っていくと中世の世界が登場するわけです。人間としてより暮らしにくい条件の下で人々が生きていくということでもあります。

それで、プリントの冒頭に書いておきましたが、これは有名な歌ですが「仏は常に在せども、現ならぬぞあはれなる。人の音せぬ晝に、仄かに夢に見え給ふ」。仏はいるはずだけれども、現実に目の前に姿を見せることはない。静かに、晝に、ほのかに夢に見えてくる。私はまだ仏さんに出会ったことはないですけども、ぜひ会いたいと思っています。

私の義母は熱心な真宗の門徒でしたけれども、九十歳になって、朝晩お経を読みながら、「極楽はあるんやろうか」と言ってますね。私に聞いても責任を持ちかねるのですけれども、親鸞聖人も「自分も迷っているのだ」と言われたそうです。私は、この精神は、あるいは親鸞さんからうちのおばあさんまで、共通してやはりその思いになります。その中であって仏というものを求めているということでもあります。

その次に、「大峰行ふ聖こそ、あはれに尊きものはあれ、法華経誦する声はして、確かの正体未だ見えず」。この時代になってきますと、ウグイスはホーホケキョと鳴くのです。なぜウグイスはホーホケキョと鳴くのかといいますと、それは法華経が広がっているからです。ウグイスの声がそう聞こえるのです。このあいだ歴史家グループで話をしたら、「えっ、あんた、ほんと？」と言つのですね。「ほんと？」って、こんなことを知らなくて何が歴史家かと私は思つのですけれどもね。ちょっと偉そうに言いましたけれどもね。(笑)

これはいずれも『梁塵秘抄』という、後白河法皇の撰による当時の歌謡の一部分です。平安時代から鎌倉時代へ、つまり十二世紀の終わりに世の中が変わる。前総理大臣の言葉を使いますと「レジームが変わった」ということです。変えようとして変わったのではなく、しかるべき時の到来で根本的に変わったのです。そのときに、京都政権に力を持っておりまず後白河が、片一方に頼朝とか木曾義仲とか義経とか、武家を見ながら、こういう文化活動をやっています。

文化で勝負したら東国に登場した武家政権は、京都政権には絶対に勝てません。ですから、鎌倉に八幡宮を持っていつているのです。こちらのほうの、山城の男山八幡宮を向こうへ持っていつて、同じように社を打ち立てているわけです。十二世紀末において、人びとは一心に祈って



います。ひたすら仏を見ようとしているわけです。これが当時の哲学です。

私が尊敬する歴史家に服部之総という方がおられます。それは先回この席でもお話ししましたが、私の非常に好きな言葉を書いておられる。服部之総は、明治維新の研究で戦前戦後にかけて大きな業績を上げられた方ですが、生まれが島根県石見国の浄土真宗のお寺の人なのです。長男ですから、真宗でいいますと本来、寺を継ぐべき人なのです。ところが、故あって自分は継がなかった。だけれども、心の奥に親鸞・蓮如を持ち続けていたという人です。

この人がこう言われました。「宗教こそは、親鸞や聖フランシスや恵信尼」。恵信尼は親鸞の奥さんです。つまり、女性が登場しているのです。「恵信尼や、およそこの地上において永遠に解放される条件とその見透しをもちえなかつた全世界の封建的農奴にとって、自己とその世界を領有するための唯一の科学であり、哲学であり、思想であり、真理であつた」(親鸞ノート)と。名言ですね。

この言葉を、私は、読んだときはあまり感動せずにスーッと行つたのですが、あらためて後に中野孝次さんという、『清貧の思想』を書かれた、ドイツ文学を得意にする評論家がおられますね。あの方がこの文章に感動されているのです。そして、『中世を生きる』で法然、日蓮、一遍など当時の宗教家を取り上げています。

宗教家を念仏を唱えているだけと理解するのではなくて、いま述べたように、この世において本当の幸せを実現できない人たち、例えば、死に瀕する病氣になったときに、単に医学だけに頼るのが、医学以外の何かに頼るのか。つまり、人間の生の証しを単純に、心臓が止まったら死かと思つたのですが、私が以前にいた大学で、死というものを判断するために、医学部が中心になつて医学の倫理委員会をつくるわけですね。そして、哲学者が入つて、死というのは何であるか、心臓は動いていて脳が死んでいる場合は死なのかということを議論しながら、この患者さんが死んだかどうかの基準、倫理規定を作り上げているのです。

そういうものは、医学という自然科学的な問題だけでなく、人間の生命というのはいつた何であるのかということを問うやり方だと思ひます。日本全国の医学部は、すべて倫理委員会を設置しています。その上で死というものを、患者さんが死んだということの基準にしているのです。それは、おそらくいま述べたような、服部之総が言われたような考え方につながるべきものではないでしょうか。

今日は神さんの話があまり出なくて申しわけないのですけれども、仏教ばかりになりがちで、ご容赦いただき

たいのですが、この世の中にはさまざまな苦勞があります。法華經譬喻品に「今此三界皆是我有」という言葉があります。「今この三界は、皆これ我が有なり」。その中の衆生は、ことごとく、これ、わが子なり（其中衆生悉是吾子）。釈迦は、実はこの世の人々はすべて自分の子どもであるといえます。

仏教の用語で私が大変感激しますのは、「衆生」という言葉を使っているということです。「民衆」とか「庶民」という言葉を使っていないのです。衆生というのは生きている人間ということです。これは仏教用語であります。この用語がほとんど今は使われていません。仏教の世界でだけ言っています。片一方で、民衆だとか、庶民という言葉ですけれども、釈迦から見たらすべて衆生、大衆（だいしゅう）なのです。多くの生き物であるわけです。「民」という字には、目に針が突き刺さり、つながれている姿という意味がある。奥の深い人間としての魂、気持ちを含んでいるということです。

その中で、この世の中はもろもろの患難がある（「而今此処多諸患難」——自分を苦しめるものがいっぱいあると。そのときに釈迦は、ただわれ一人のみよく救護を為す（「唯我一人能為救護」）——「私が救護す」というわけです。なぜ釈迦が助けるのかといいますと、我々の力で救えないものが圧倒的だからです。そこで、釈迦が、衆苦充滿していろいろな苦しみを受け、悩んでいるときに、私があなただけを助けましょう。この世の中、三界がことごとく火宅である——火の世界のようなものである。その中で、「生老病死の憂患あり」——生きる、老いる、病む、死ぬ、この四つを持っている。釈迦はそれを引き受けて、救いといいますが、生きるよりどこを与えようということなのです。

今、お話している時代は、少なくとも七百年、あるいは八百年前のことですが、現在よりもはるかに生きにくい時代です。飯だって？ 回食つたかどうかかわからない時代です。ろくろく飯も食っていないような世の中で、災害がやってきます。病気がやってきます。それから、貧困の問題があります。貧しくて生きていけないということがあります。飢饉がやってきます。その次に内乱で、対外戦争は蒙古大襲来以外は一切ありませんでしたけれども、少なくとも国内の争乱は起きています。こういうさまざまな、人間に襲いかかってくるものに我々は直面せざるを得ないわけです。

そのときに、例えば一例を挙げますと、十三世紀初めの鴨長明の『方丈記』をちょっと読んでみますと「世ノ中飢渴シテアサマシキ事侍リキ」——飢え苦しむことがあるのだと。「乞食路ノホトリニ多ク、ウレハ悲シム声耳ニ満テリ」「刺ツサヘ疫癘ウチ添ヒテ」——病気が、伝染病がはやり、「路ノホトリナル頭、スベテ四万二千三百」——道を歩くと死んだ人が四万二千三百人倒れている。「ソノ首ノ見ユルゴトニ額ニ阿字ヲ書キテ」、つまり、梵字の「阿」を書いて成仏を祈る。こういう実態なのです。それ程、生きることが困難であるということです。もう一つ

は「ヨビタタシク大地震振ルコト侍リキ、ソノサマ世ノ常ナラズ、山ハクツレテ河ヲウツミ、海ハカタブキテ陸地ヲヒタセリ」。これは一一八二年から一一八五年、ちょうど鎌倉幕府が成立しようとし、平家政権が滅びようとしているときの災害です。

これを受けて、日蓮が一二六〇年に『立正安国論』にこう書いています。「天変地天・飢饉・疫癘、遍く天下に満ち広く地上に迸る（天変地天飢饉疫癘遍満天下広迸地上）」、人間の生きていく条件を崩そうとしていくものが地上にはびこっている。今日のように集まって、本を讀んで、プリントを讀んで、映像を見ているということはとてもあり得ない時代です。今から七五〇年ほど前のところですよ。

このときに、人間としていろいろな問題が出てきます。例えば、飢饉がもろろん大きいのですけれども、病氣、いま社会的に認識が深められているハンセン病です。これは「業病」と言われていました。だけれども、幸いに人類はこの病氣を克服し始めました。もう克服したと思えます。これについては医学史を研究された立川昭二氏が、「病氣と宗教というものは切っても切れない結び付きがある」と言われています。

医学の力がない。医学がないときには、何にすがって病氣を治そうとするか。これはやはり宗教でしょう。宗教によって自分が生きていくよりどころを持たず、今日死ぬ命がひよっとしたら何日か延びるかもわからない。こういう真つ暗闇の中でどういふふう生きていくかということとを考えますと、例えばハンセン病という当時は恐るべき病氣、今は恐るべき病氣ではなくなりましたけれども、これに対してどういふふう救いを生み出していくか。ここに宗教が登場してくるわけです。これはキリスト教の世界でも同じことでありまして、二千年前に、ルカ伝の十六章に「ラザロと金持」という一節がありますので、もし興味のある方は聖書をご覧いただいたらと思います。

人類共通にハンセン病とぶつかっているのです。これをどこで解決するか。うれしいことに、人類が二十世紀の末に克服をいたしました。人類が克服したウィルス病の唯一が天然痘なのですが、ハンセン病は、聖書の世界でも日本の古代・中世でもよく出てまいりますけれども、これもまた克服いたしました。

当時、鎌倉時代ではこう言っています。「現世には白癩、黒癩の身を受け、後世には無間地獄の底に墮ち」、これは、播磨の国、兵庫県の小野にある浄土寺の一一九二年の文書の一部です。素晴らしい寺です。西に向くと西方浄土を望んでいますから、阿弥陀仏の後ろから夕日が差してきて仏を輝かします。ですから、仏さんとかお寺を建てる時はやはりその立地条件をよく考えて、特に浄土思想のお寺はそのバックをよく考えていますが、金色に輝く仏の時代でもやはりハンセン病というのは恐るべき病氣でした。これに対して鎌倉の仏教がどう対処したのか。医学も何も無い時代にその人たちの生きるすべをどういふふうにつくり出していかか。

こういう問題に取り組む一連の鎌倉仏教があって、西大寺の叡尊、一遍、日蓮など、鎌倉の僧が出てきます。日蓮の言葉を引用いたします。



「世間に人の恐るる者は、火災（ほのほ）の中と」——火災で家が焼かれること、「刀剣（つるぎ）の影と」——武士が人殺しを行う殺人の影、「此身の死するとなるべし」——自分が死ぬことである。「牛馬、猶身を惜む」——牛馬でも自分の命を惜しむ。牛でも、殺されると思ったらおびえているではありませんか。直感的にわかるのです。「況や人身をや」。「癩人猶命を惜む」——当時のハンセン病にかかったその人も、なお命を惜しむのは当然だと。「何況壯人をや」。つまり、元気な人も命を惜しまなければならぬということを言っているのです。この時分の宗教は、とりわけ仏教は、当時の社会の病気だとか生老病死の憂患と直面しながら、人たちに生きる教えを説いているのです。釈迦の世界ですでにちゃんとそういうのを準備してくれていたのだらうと思います

が。それから、ちょっと急ぎますが、人身売買がかなりありました。日本において人身売買を無くしたのはどうも秀吉の頃だと言われていますが、例えば室町時代の『閑吟集』という歌謡集を見ますと、「人買舟は沖を漕ぐ」とても売らるる身を　ただ静かに漕げよ　船頭殿」。売られていく人が、おそらく日本海を舟で運ばれているときの歌なのです。人身売買の姿を示しています。

外国へ売られる人たちが出てきます。日本人を外国へ売り始めます。鎖国国家になるとそういうことはなくなりますけれども、それまではありました。秀吉はこう言っています。一五八七年、つまり、徳川政権の成立前のことですが、「大唐・南蛮・高麗へ日本人を売り遣し候事停止（大唐・南蛮・高麗へ日本人を売遣候事曲事）」、外国へ日本人を売るなど言っています。こういう実態があったということです。生きにくいものでありました。

後ほど説経節をお聞きいただくわけですが、こういう生きにくい中世の時代、これが秀吉政権によって、あるいは徳川政権によって一定の解決をはかるわけですから、この中で多様な思想、文化が生まれてくるわけです。例えば、服部幸雄先生という歌舞伎の研究者ですが、宗教と生活と娯楽、娯楽というのは芸能です。それらが一つになっているのだと。中世においても、江戸時代、近世に入ってもこういうつながりがあります。

その中で、説経節が出てまいります。文字を書く人はそついませんから、一定階層以上の人しか文字が読めません。公家・武家は読めるで

しようけれども、一般庶民は、まあ、書けないとは申しませんが、非常に書く機会が少ないです。江戸時代でも、最近の研究では、パーセントが上がってきておりますけれども、江戸時代の中頃だったら、男子の三〇～五〇パーセントぐらいしか字は書けないのではないのでしょうか。女子はその半分以下です。こういう中で、文字を使わなかつたで人々を救つもの、語りものが出てまいります。これが一連の説経節です。

後ほど聞いていただくのでポイントだけ申しますが、これは、話は中世のような感じですけども、実際に広がってまいりますのは江戸時代初期、一六〇〇年代の前半ぐらいと見てください。有名なのは『信徳丸(しんとく丸)』です。これは、年配の方は、今日は皆さんお若いからあまりご存じでないかと思いますが、私の義母なんかは一九〇〇年生まれでしたから、「あわれなるかな、しんとくは」と、こう言うのですよ。それで、私に何気なく聞かせるわけです。お経も一緒に付き合わされましたから何となく覚えまして、ばあさんが死ぬと消えてしまいました。

この『信徳丸』、これは、生駒のふもととの河内の高安の里に信徳丸がいて、ハンセン病に罹ります。いろいろ経過があつて、天王寺の引声堂の後堂の縁の下で、もつ餓死しようとしている。そこに許嫁の美貌の乙姫が巡礼姿で信徳丸を探しにやってくる、ここで出会います。そして、乙姫が病の信徳丸を担って袖乞いに出て、ここに奇跡が登場する。つまり、治らない病を治すのです。「治る」ということで民衆に希望を与えるのです。

それから、後ほど聞いていただく『小栗判官』ですが、これはよくご存じですね。泉州に行きますと、それこそ大阪の阿倍野の王子から南へ行くと泉州に小栗街道というのがあります。私はあの周辺の村を長年調査したことがあるのですけれども、土地の人は小栗街道、小栗街道と言っております。海岸沿いを通るのが紀州街道ですけども、こちらは山手を通っています。

小栗判官が通った。土車で行くのです。この人が、神奈川県藤沢の藤沢上人の勧めで熊野の湯峯へ行くと。そして、諸人、人や山伏の力で辿りついて照手というのに会う。「小栗判官・照手姫」という有名な話ですが、そして、祈って、一七日で目が開き、二七日で腰が立ち、七七日、四十九日満願で病気が治るというものであります。

現代科学的に言つと「こんなの、治るはずがないか」と言つかもしれませんが、やはり人間というのは魂に何か持っていないといけないのです。医学で注射して治すだけではなくて、自分が生きる力をやはりどこから持たないかぎりはだめです。神仏の加護を小栗判官が教えます。

つぎに、有名な『山椒大夫』の話です。これは、摂津の国東成郡生玉庄大坂、これは「おおざか」と言いたいですね。その生玉さんのとこ

ろに天下一説経与七郎という者がいまして、信多純一氏によるとこの人が四天王寺でそれを説経したといひます。そして、阪口弘之氏は、十三世紀、鎌倉時代の観尊・忍性という律宗のお坊さんの宗教活動を踏まえて、山椒太夫が出てくるのだということを描き残されています。

観尊というお坊さんは偉いですね。蒙古大襲来というのがあって、「神風」が吹いて、モンゴル軍の船がひっくり返り、国難を逃れたという話を戦前の小学校の教科書で習いましたが、この二二八一年の観尊の祈禱は違うのです。「東風が吹いて、元の兵船をことごとく向こうに送り返す。船を焼失されても乗っている元からの来人は一人も殺さないように」と祈るのです。「日本の海に沈める」とは祈っていないのです。こういう祈禱をしたのです。ですから、私たちが習った小学校の教育はいつた何だったのかというのをだいたい百年を取ってから気が付いたのですけれども。

『山椒大夫』は有名な話で、安寿と厨子王という、森鷗外がこれをわかりやすい物語にして、国語の本にも登場してくるのではないのでしょうか。

この鷗外の『山椒大夫』は、やはり近代人の作です。中世はもっと残酷です。『山椒大夫』のように人を徹底的に苦しめた者は、竹ののこぎりで首を切られるのです。中世というのは人間の生きにくい時代ですから、それだけに人々を裏切った者は、「一引き引いては」と言って切りにくい竹ののこぎりです。

「一引引いては千僧供養、二引引いては万僧供養」、「大夫をばこの白洲に腰より下を掘り埋め、五人の子に竹ののこぎりにて首を引かせよ」。そして、首がついに落ちる。これが、山椒大夫という、人を売買していた人に対する中世的なペナルティーです。森鷗外は近代社会の感性を持ち、医師としてかれは人間を救つことを医学の目的にしているわけですから、残酷な場面を避けたのでしょう。

中世の時代の実態を語りますと、高野山領の阿豆河荘、和歌山県清水町というところがありまして、そこに有名な、年貢が納められなければ「耳を切り、鼻をそぎ」という刑罰があります。生きにくい時代に生きにくい状態におかれたら、助けてくれるのは仏教しかないでしょう。

將軍であろうが武家であろうが百姓であろうが、仏の前では拜む。死んだら仏になるけれども、現世に生きていくかぎりでも仏様に頭を下げなければいけない。そういう時代です。ですから、最終的には神仏が救うことになりません。

最後に江戸時代に生きる巡礼の祈りをとり上げます。私がたまたま見た史料に、三重県の東紀州の長尾村いた足なえの人が、杖二本で西国巡礼に出掛けます。足の立たなかつた小栗判官が、仏によって救われて、湯峯の温泉に入って全快するという中世以来の話に励まされて、それを現実の歴史に持ち込んで、自分たちに生きる勇気をもたらすのです。

現に江戸時代、元禄の時代、一六九二年のことで、その人がつえ二本で、土車といいますが、本当に今から見ると貧弱な車で出発いたしました。西国三十三所の観音巡りに行こうとします。ところが、途中で病気になるまで、今度は村々が責任を持ってふるさとに送り返してきます。ちゃんとこういう村の組織ができていくことです。旅人が死んだときも、往来手形にあるように、村が責任を持って処理します。

もう一例、これは現在は三重県の津市に入っていますが、登勢という人物がおりました。江戸時代、十九世紀前半に、かなり有名な話になっていますが、孝女登勢というのがあります。今も墓碑がありますが、津藩、藤堂藩の領下第一、抜群の孝心をもって、津藩がその家の食いつ持として、土地を保証してやるのです。養父母がともにハンセン病にかかるのです。養女に入った働き者の登勢に迷惑をかけてはいけないというので、登勢が出掛けているあいだに両親が密かに西国巡礼に出るのです。

巡礼というのは、やはり祈りを込めて回っているのです。巡礼に行くことによって神仏と直面しているでしょうね。これを、もう病気で歩けないのに行くのです。登勢の知らないあいだに両親が出かけたために、これを追いかけます。「あまりに病気のくるしさにぞんじ付けるは、熊野本宮にては、かやうの病ひも全快したる例も聞およびければ、熊野本宮、夫より西国巡礼いたし度心願」、熊野本宮に参れば病が治る、そういう思いです。

これは、例えば巡礼というのは、江戸時代はもう戦争のない社会で、今日の我々と同じように、好きなところに好きなときに行ける時代になりました。江戸時代もだいたいそうです。途中で追剥ぎなんかは出るでしょうけれども、ともかく戦争に巻き込まれて殺される時代ではなかった。ですから、旅行は盛んなのですけれども、そういう巡礼の中で祈りを込めているというふうに思います。

いろいろな巡礼があります。三十三所もあれば六十六部もあります。巡礼することによって何か、本当に真剣にやれば、私にはそれがありませんけれども、キリスト教という啓示、黙示、レベレーション(revelation)がある。何か受けるはずなのです。観光バスで行ってそれが受けられるかどうかはわかりませんが、それです。

それから、巡礼で行く人々を支える善根というのがあります。施す。その人たちに貧しいながらも食事を施して、次に送って巡礼をさせる。こういう善根宿があります。現代文明社会は、こういう、本来、人間が自然と神または仏と直面していた社会を大きく変えてきました。そのため失ったものがずいぶんあります。

しかし、その現代の文明社会、これはブッシュさんがイラクに対して「あなたの国は文明国でない」と言いました。なぜあの国は文明国でないのか。あの国はあの国の宗教と文化を持っているはず。そして、国家を持っているはずですね。アメリカは、「では、あなた方の文明は

何なのか。あなた方はなぜイラクと戦争をしているのですか」と言われたら、これはアメリカだって立ち往生しますね。ですから、本当の文明というのはいったい何なのか、あるいは、現代の文明を超える考え方を、かつて宗教を原点として姿から考えるべきではないかと思えます。多文化の共生を考えるべき時代です。

ちよつとまとまりませんでしたけれども、あと、説経節をはじめ、あるいは諸先生のお話を聞いていただいて、巡礼する意味、信仰、巡礼、芸能についてお考えいただきたいと思えます。では、終わらせていただきます。(拍手)

司会 ありがとうございます。

報 告

「宗教の身体性と根源性」

福 家 俊 彦

(天台寺門宗教学部長・総本山三井寺執事)

司会 では、引き続き天台寺門宗の教学部長であられます、総本山三井寺の執事の福家先生にご報告いただきたいと思えます。福家先生、どうぞよろしくお願いいたします。

福家 ただいまご紹介をいただきました三井寺から参りました福家と申します。本日は、初めて酒井先生にもお会いいたしました。先生は私の肩書からのイメージと実物はだいぶ違つと、皆さんも「あいつ、ほんまかいな」という思いをされているかと思いますが、その点はもうあきらめていただかなければいけないと思えます。しばらくではございますけれども、私の報告を「宗教の身体性と根源性」というテーマでさせていただきますと思えます。皆さんのお手元に資料を配らせてもらっておりますので、それに沿つてお話をさせていただきますと思えます。このお話をいただきまして、どういふお話をすれば良いのかいろいろと迷つたのですけれども、私も大峰の奥駈修行を行つておりますが、まあ並の行者ですので、大行者の体験なんていふ話を私がするのもふさわしくないだろうといふことで、あとでシンポジウムもございまして、そこで問題点が浮かんでくればと思ひ、大きなテーマで報告いたします。これは、私の年のテーマといいますが、私の勉強の大きな設計図、概略みたいなことでございますので、これを全部わかっているというわけではございませんが、そういう意味でお聞きいただきたいと思ひます。

小泉八雲、ラフカディオ・ハーンという、皆さんもよくご存じの、妖怪、怪談の作家がいま。その小泉八雲の小説に『人形の墓』という小説があります。短いものですけれども、これは八雲の家に十四歳か十五歳ぐらいの少女が子守として雇われています。八雲がこの少女の身の上話を聞くのです。小説ですから、もう一人、万右衛門という人物と八雲がこの少女の話を書くという設定です。

そのイネの身の上話ですけれども、もともとイネは、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、おばあちゃん、妹と六人家族で住んでいました。お父さんは建具屋、お母さんは髪結いをされて

いて、まあ普通の生活をしている子でした。ところが、お父さんがまず亡くなるのです。次に、お父さんが亡くなって八日目に、今度はお母さんが亡くなります。この地方の風習では、家から近い時間に二人死人が出るとお墓が二つできるわけですが、その隣に人形を身代わりにお墓をも一つ作るということが行われていた。ですから、『人形の墓』というタイトルが付いているのです。

家から死人が二人出て、「もうこれ以上出ないよ」ということで身代わりの人形のお墓を作るんだよ」といふふうに教えられますが、イネの家はそれをしなかった。それでどういふふうになったかといいますと、今度はお兄ちゃんの具合が悪くなります。お兄ちゃんといっても、お父さん、お母さんは亡くなっていますから、その家にとっては働き手なのです。その生活の支えになる人が病気になるので、病状がちっとも良くならない。

そしてお母さんが亡くなって四十九日目、忌明けというのですけれども、その日にお兄ちゃんは、夢にうなされ「お母さんが袖を引っ張る」と言います。おばあさんが、母親に向かって、まあ、死んでいる母親ですけれども、そんなことやめろ、としかるのですけれども、結局はお兄ちゃんも亡くなります。そうしているうちにおばあちゃんも亡くなって、イネと妹の二人になります。もう、そうならしょうがないですから、それぞれ他家にもらわれて行って、別々になってしまいます。イネのほうは幸い八雲のお子さんの子守に雇われて今になっているという、こつという身の上話をずっとします。

身の上話をした後で、イネはその場から立ち去ろうとするのですけれども、八雲はもうちょっと万右衛門としゃべろうと思って、イネが座っていた座布団に移ります。そうしたら、イネが急に「その座布団に座ってはいけません。私が座っていた座布団に後から座ると私の不幸の種がうつります」という。そう言われたけれども、八雲は引き受けて座ってあげるといのが小説のオチというか結末なのですけれども、こつという小説がごさいます。

この人形の墓を作るという風習も興味のあるところでございすけれども、自分が座っていた座布団、そこから立ったときに、次の人が座る前に裏返しておくとか、我々もよくしますよね。この小説ではボンボンとたたけということになっていますけれども、何と云うのでしょうか、俗信みたいな、また民間信仰レベルかもわかりませんが、自分の何かが物に移って、今度それが他の人に移る。こつという考え方というのは、先ほど酒井先生もおっしゃられたように、一つの文化だと思えますね。

迷信と言ってしまうはそれでおしまいかもしれませんが、これも日本の文化であろうと思つのです。実際に自分の体から何かが出るわけでも何でもないのに、こつという感覚は、私がテーマにする身体性につながるかと思えます。



人間の体についての理解は、ひとつの哲学です。哲学といっても頭だけではないですね。自分の体を動かしながら、宗教にしても、今日のテーマになっている巡礼にしても、芸能にしても、声であるとか身ぶりであるとか、自分で歩く、巡る、そこに宗教的な真理といえますか、広い意味の身体性の話が出てくると思います。こういうようなものが宗教につながっていくのではないか。そういう民間信仰的なことと普遍的な宗教の信仰が必ずしも一致するわけではないと思いますけれども、一つの提起になる話かなと思います。

その前提として、やはり人間には不幸が必ず降り掛かってくると思いますか、簡単に言いますと「人間は必ず死ぬ」ということですね。永久に生きるわけではございません。皆、誰もが必ず死にます。さらには、我々は生まれることを希望して生まれたわけではございません。勝手にこの世に投げ込まれて生まれてきたわけですが、どこから来たかわかりません。死んだらどこに行くかわかりません。こういう存在が人間であります。つまり人間は有限だということだと思います。

人間は有限である。人間は死ぬからこそ我々は文化を築き、さらに宗教を築いてきたわけです。宗教の根源というのは、やはり我々は死ぬ。それに向かつてどのように生きるか。まあ、そんなにたいそうな、立派に生きなくても、少なくとも幸せに生きたいという気持ちで生きているわけです。各世界、どこにもいろいろな宗教があるわけですから、こういうところが、宗教が生まれてきた一つの原因かと思うわけです。

そういうことで今日のテーマのほうにつなげていきたいと思えます。私は仏教の世界にいるわけですが、いつも気になるのは、学問としての仏教学と、我々が信者さんなり檀家さんなりとお話をするレベルが必ずしも一致しないと思えますが、整合性が自分の中でついていないということなんです。

我々の世界でも、天台でございまして、天台学会という学会がございまして。そこでは伝教大師教学、どういう思想であったとか、經典の解釈であるとか、そういうことの学会がございまして。また別に布教師の会というのがございまして、これは一般の方をどういふふうに教化をしていくか、伝教大師の心をどういふふうに伝えるかという、そういうのが布教師の会です。

これが、いつも方向性が違うのでうまくいかない。これが私には歯がゆいといえますか、何とかならないのかな、両側でもうちよつとうまいこといかないのかなというのが従来からの気持ちなのですけれども、実は他にもいろいろありまして、たとえば仏教学と民俗学もずいぶん違います。民俗学は、例えば民間信仰的なことを扱うわけですから、仏教学の方法とかなり意味合いが違ってきます。歴史的に言いますと、私どもの三井寺というのは

園城寺というのが正式の名前ですけれども、天台寺門という、天台の中でも比叡山から分かれた寺門派の総本山になります。よく南都北嶺という言葉がございますけれども、南都は奈良で、東大寺、興福寺という二つの寺を表します。そして、北嶺、北の嶺といえますと、比叡山延暦寺と園城寺、三井寺を指すわけです。この四つをもって四箇大寺というふうにならな中世では言っています。

この四箇大寺ということとどういことをやったかといえますと、例えばこれはもう江戸時代の末期までずっと続きますけれども、禁中、今の御所の中で法華八講をやりま。禁中御八講という、いわゆる法華經の論議ですね。これに参加するのは、四箇大寺だけなのですね、それができるのは、それが、明治以後、仏教の行事が宮中からなくなってしまうので、途切れたわけです。そういうわけで、中世には園城寺、寺門派というのは、けっこう権門というのですか、権威があるというかたちで、比叡山延暦寺とともに日本の歴史、仏教史の中で果たしてきた役割というのは非常に大きいわけです。

そういう三井寺の中に別所というのが成立します。この別所というのは、権門的な、ちよつと威張ったようなお寺の組織、そういう人たちの集まりではなくて、今日のテーマになるような芸能の人たちですとか、いろいろな階層の人たちが集まっていた場所なのです。ですから、同じ三井寺でも、非常に高度なといえますか、高級なものと、もうちよつと大衆的なものというか庶民的なもの、それぞれを担う部分がある。ですから、園城寺の本体を本寺と呼ぶとすれば、こちらのほうは別所という、こういう呼び方をしているのかと思います。

そういう意味で、二つのものを何とかくつつきたいという私の願ひから言いますと、先祖供養なんか、これは仏教本来の釈迦の思想からほどこからも出てこないわけです。中国から、朝鮮半島を経て仏教が入ってくる中で変容してきているわけです。当然、道教とかいろいろな影響が途中で入ってきているというふうに言われておりますけれども、それが日本の仏教の多様さといえますか、特色で、その幅の広さをうまく説明すること、これが私自身のテーマでございます。今日はそれに沿ってお話をひとつさせていたきたいと思います。

それで、一つはやはり熊野、修験道ということと。もう一つは、別所ということと。まず修験道のほうですけれども、修験道には二つ流派がございます。天台のほうを本山派、真言宗のほうを当山派と、これは中世以降そういうふうに呼びならわしています。

真言宗の当山派というのは、醍醐の三寶院、天台宗の本山派というのは、園城寺、三井寺ですけれども、特に京都にございます聖護院門跡、ここが本山派の中心になります。この二流派が中世以降、並び立ちます。これが非常に勢力を持って、全国の修験の山々をどちらかに色分けしていきます。

特に大峰の奥駈の関係で言いますと、熊野から吉野、吉野から熊野と行き方は二つあるのです。熊野から入る場合と吉野から入る場合と二つ

の方法があるのですけれども、天台のほうは熊野から入ります。熊野から吉野に向かって歩きます。これを順峯と言います。逆に吉野から熊野に行くのを逆峯と言います。順逆なのです。ですから、天台のほうは熊野から吉野に向けて歩く。これが正当な歩き方ということになります。当山派、真言系のほうは、吉野から入って熊野に抜ける、こつこつ歩き方が正当だと言われています。

とはいえ、必ずしもこのとおり歩いているわけではないのです。中世以降、本山派も必ずしも熊野からではなくて吉野から、どうしても京都から行きますから、吉野のほうに近いわけです。熊野まで先に行こうと思えば、熊野への街道をずっと行って、本宮まで出ないといけないわけですから、まあ、吉野から入るほうが便利だったようで、順峯というのはずいぶん廃れていたところでございます。順峯が復活するのは、実は私どもの宗派が戦後、何とか順峯を復活しようということで、途絶えていた南奥駈道を地元の山岳会の人たちと、熱望もございましたので、一緒にちよつとずつ解決しまして、全部行けるようになったのは昭和五〇年のことです。ですから、そんなに昔のことではありません。

当時、南奥駈道というのは、吉野の本宮から川を渡りまして、玉置神社に向います。大きな千年杉が林立している神社ですけれども、どう言うのでしょうか、本当に古代の熊野が、そのまま生きている荘厳な境内の神社なのです。そこまでの道というのは、通れない状態がずっと続いていました。それを何とか地元の山岳会と、新宮のほうから道直しをしていただいたりとか、そういうことで歩けるようになりました。その玉置神社から次は前鬼。修験道、特に天台の修験道の開祖、役行者は鬼を従えるほどの法力を持っていたといえます。前鬼と後鬼、二匹と言えはいいのか、二人と言えはいいのか、鬼を従えています。前鬼というのは、その末裔が住んだ所と言われています。

坊が五つあって、いま残っているのは小仲坊という坊一つですけれども、五鬼助さんとか五鬼継さんとか、そういう五鬼何とかという姓の五つの家がありました。そこまでが南奥駈道で、前鬼から吉野に向けてが、いわゆる多くの宗派が行っている北側の奥駈道ということになります。ですから、熊野から前鬼の区間が非常に道が荒れていたのを戻したのが、昭和五〇年です。それから私どももずっと歩くようになって、熊野から吉野まで抜けていきます。

だいたい、通しますと十日ぐらいかかります。十日というとなかなか現実には参加者が少ないので、今は三回に分けて、だいたい三泊四日を三年続けてやります。そういうことで、今は毎年、そうですね、三〇名ぐらい。三〇名ぐらいが限度ですね、山小屋がもう泊まれませんので。弥山という山の山小屋は非常に大きいのでけっこう入るのですけれど、その途中の山小屋が、三〇名ぐらいまでしか泊まれないのです。

日本の宗教にとって「山」というのはやはり非常に大きな意味を持っていると思います。いつから修験道ができたのかというのは、非常に難しい問題ですけれども、今でもお寺には必ず山号、山の号というのがありますね、「何とか山、何とか寺」という。これは、べつに山にあるお

寺ではなくても、町の中にあるお寺でも「何とか山、何とか寺」と言っています。それだけ山というのは日本人にとって大きな意味を持っていますし、仏教もそれを引き継いだということです。

特に、先ほど申しましたように、山には鬼というのがいる。これはやはり古くから言われたのではないかと思えます。この鬼を役行者は従えたということですから、山には人間の力を超えた、特に「怖い」というのですか、荒ぶる神がいる。滋賀県で一番高い山は伊吹山ですけれども、神話ではヤマトタケルが伊吹山に登ったときに白い大イノシシに姿を変えた神さんにやられるわけです。それだけ伊吹は非常に恐ろしい神、荒ぶる神がいるということです。そういう山のイメージは非常に日本人には強いのです。

仏教が入ってきますと、そういう山の力、霊をコントロールできる人たち、それが山伏と言われたり、修験者と言われたり、そういう人たちが登場します。もちろん、山の考え方は、田の神様でありますとか、春に降りてきて秋に収穫をもたらしてまた山に帰る、こういう神様のとらえ方もあるでしょうし、山の中には死霊というのですか、死んだら山の中に魂が行って、そこから天に昇るといって、山中他界観もあり、さまざまなのが積み重なっていると思います。現在、だいたい参加する人たちはお寺の住職です。住職といいますが檀家寺の僧侶ではなくて、いわゆる、祈祷僧です。この人たちは、信者さんを集めて、人々の人生相談的なことをするのです。よく地域でも、檀家寺には先祖供養の法事の相談には行きますけれども、家を建てる、建前をする。法事の日も、まず相談に行くのは祈祷寺ですね。

都市部ではそういうことはもうほとんどなくなりましたけれども、田舎のほうへ行きますと、どう言ったらいいのでしょうか、お寺の使い分けをされているのはごく普通です。檀家寺と言われるのは、先祖の法事をする回向寺です。でも、それ以外のこと、このごろ病気がたくさん出るから何とかならないかとか、今年はいいことがあるように、「一年のおはらいをしてください」とか、そういうことはほとんど祈祷寺へ行きます。そういう寺の住職が、私どもの宗派にも多く、彼らが大峰に参加しているわけです。

どういふつもりで来ているかといいますと、やはり自分たちが地元の人たちの願いを聞いて、それをかなえるために、病気だったら病気を治すアドバイスをしてあげたりとか、家を建てる時には何か悪いことがないように修法をしたりとか、そういうことをしている。こういう願いを聞いているわけですから、一年間、山に行つて、山と自分が一体になって、そこで自分の汚れたものを落とし、なおかつ、非常に大変な修行をする、そして山の霊気といいますが、自分の体を再生して、自分の寺に戻るのだと。ですから、どうしても来なければいけないということ、大峰に来る参加者が多い。

それが今先ほど言ったどういふ「山」の考え方に該当するのか、もうちょっと考えなくてはいけない問題ですけれども、基本的には、やはり

山の中で一年の穢れを、自分の中にたまった垢を落とし、山の靈氣、いろいろなものを調伏したり、先ほども言いましたような鬼を退治するぐらいの力を自分で受けたという、そういうつもりになって寺へ帰るのだと思うのです。そしてまた一年間、その地域の人たちの願いや相談に乗る。こういうのが我々の奥駈修行に参加している者のだいたいの気持ちです。これはどこまでさかのぼれるかわかりませんが、江戸時代ぐらいとそう隔たりはない考え方かなと思います。それが今でも続いていると思います。

ご存じの通り、修験道というのは明治五年に国家によって一度廃止されます。廃止をされて非常に打撃を受けるわけですが、そういう気持ちというのは、そういうかたちで残っています。これが修験道の現況です。

ちなみに、大峰奥駈というのは、だいたい夜中の一時半ぐらいに出発して、到着するのが早くて夕方の四時、五時、これを三日なり四日なり続ける。山の中ですから、何キロ歩いたかと言われるとちよっと困りますけれども、五キロでも、山ですから下がったり上がったりがほとんど続いていますから、地図上では大したことはないと思うのですけれども、時間的には十四～十五時間を毎日歩きます。これが大峰の奥駈の修行です。だから足の弱い人は来られない。若い人が強いかというと、そうでもないのですね。二〇歳代の子でも荷物をたくさん持たせたら「足が痛い」「ひざが痛い」と言いますから。年配の人でも、そうですね、七七、七八歳まで来られた方もいますから、決して年齢には関係ない。そういうところで、奥駈修行、特に熊野から吉野への順峯、これが私どもの宗派の特色となっています。

次に、別所ですけれども、三井寺自体は天津市、琵琶湖畔にあります。この南に東海道が通っています。三井寺の別所は、東海道と東海道の間道の小関越えという道に挟まれた場所にあります。「山路来て何やらゆかしすみれ草」と芭蕉の句がありますけれども、これがちょうど小関越えを通ったときに詠んだ句だといわれています。

この三井寺の別所を中心に、今日お話があるような説経節の流派ができました。特に中世の説経節といえますと二つの大きな流派があります。一つは安居院流という、これは浄土真宗のほうに流れ込むような安居院澄憲という人がつくったものです。ちょうど源平の頃に信西というお坊さんが非常に権力を握りましたけれども、澄憲という人は彼の子どもです。十二世紀の前半ぐらいですが、これが安居院流で澄憲。もう一つは三井寺の定円という人が始めたのが三井寺流とされています。

定円の正確な生没年はわかっていないのですけれども、十三世紀の人です。ところが、江戸時代になりますと、この三井寺流というのはなくなりまして。ですから、いま我々にその説経節が伝わっているわけではないのです。

どうして消えたのかという話ですが、佛敎大学におられた関山和夫先生は、説経浄瑠璃ですね。近松門左衛門とか、浄瑠璃の世界に説経節の

人たちが行ったのだらうと、こういう論を述べておられます。その一つの根拠になりますのは、三井寺の別所というのは、中心になるお寺が近松寺（ごんしょうじ）と言っておりますけれども、三井寺流の説経師たちがたくさんいました。説経師だけではなくて、他の芸能の人々もたくさん集まっていたという記録があります。

その近くに、今日出てくる小栗の話もそうですけれども、関寺という寺が登場します。ここは、一遍上人の時衆と関係あります。『一遍上人絵伝』というのが有名な絵巻がありますけれども、この関寺の前で一遍上人も踊り念仏をしています。これは非常に象徴的ですけれども、関寺の踊り念仏のときに、関寺側から見物している人たちは三井寺の坊さんです。これは真つ白の法衣を着ています。そして、踊り念仏をしているのは、真つ黒の法衣の人々です。

一遍上人には申しわけないですけども、その当時は、三井寺にいる僧たちは、官僧というのですか、ちゃんとした正式な坊さんです。念仏の踊りをされるのは遁世僧に近い、そういう人たちが、時衆の人たちではないかなと思います。そういう人たちが、関寺の前に出ています。小栗も関寺までやってくるのは、時衆の話が一つポイントとしてあります。

まだ他にも言うことはあるのですけれども、もう一つ非常に面白いのは、別所を中心に庚申信仰というのが広がったということです。庚申信仰というのは申待といまして、庚申の日行われた民間行事です。十干十二支の庚申ですから、六〇日にいつペン来ます。昔は六〇日に一度、皆、村中の人々が集まって、徹夜で一杯飲んで騒ぐという日があったそうです。

庚申というのは、この日ワイワイと騒ぐ人間の中にどうも三戸という三匹の虫がいて、これが人の寝ている間に頭から抜けて天界に行って、天帝にこれだけ悪いことをしていたと報告をする。こういうことを言われるとだんだん寿命が縮まるから、庚申の日は寝ないでおこうという話になるわけです。これはもう、平安時代からちゃんとした行事としてあります。これが民間に広まって、一杯やったりとか、ワイワイ騒いだりになったのだと思います。

これが明治になりますと、非近代的だ、前近代的だということまで廃止になるわけなのですけれども、庚申信仰というのは、そういう意味では、仏教でもない、ちょっと中国の道教の要素も入っていますし、簡単に言いますと民間信仰ですね。これは庚申縁起というかたちで広まるのですけれども、これを広めたのが三井寺の修験者だと言われています。

これは青面金剛、青い顔の金剛です。これを本尊として立ててやるわけです。

大津といえますと、大津絵というのを皆さんもご存じかと思えます。「藤娘」とか、「鬼の念仏」とか。ところが、大津絵の古いものは、この

庚申の青面金剛が多く、あとは「十三仏」とか阿弥陀さん（「阿弥陀仏」）ですね。

「大津絵の筆のはじめは何仏」という、これも芭蕉の句ですけども、これが一番、大津絵という言葉、表現が文献上出てくる初見資料という事になっています。実際は寛永ごろからあったというのが一般でございますが、私はもうちょっと古い時代にその大津絵に近いものが、この別所を中心にあつたのではないかなと思っています。

その中心に、こういう青面金剛とか阿弥陀さん、我々庶民が身近に持って使うという、そういうかたちで広がった、それが大津絵の始まりではないかなと思います。

ですから、三井寺の別所というのは、説経節を含めて芸能の人たち、あと時衆とか、時衆と非常に関係の深い連歌師。さらには、蓮如さんの浄土真宗を信仰する人々。それと庚申信仰や大津絵を生み出した人々。こういういろいろな人々や要素がごちゃ混ぜになったものが別所の特徴です。それと、園城寺の本体部分とが微妙な相互関係を繰り返しながら来た。これが、先ほどから言っております歴史と宗教の二重構造の表れです。従来ですと、その本体部分の歴史的事件、有名な坊さんの歴史を並べていくとだいたい仏教史になったんですけども、宗教的ないろいろなものが集まった別所のような存在を視野に入れないことには、これから本当に我々が生きていく上で、どういうふうに宗教的な信仰や真理を探していけばよいかわからない。当初に言いましたように、宗教はどうして出てきたか、どういうかたちで今日まで来ているのかというのが、やはり二つの方面から付き合っていないといけないのではないかというのが、私の今日の報告でございます。どうもご清聴ありがとうございました。（拍手）

質問者 A 関蟬丸神社と書いてあるのですけれども、そちらはやはり芸能に関係するのでしょうか？

福家 そうですね、時間がないので省略しましたけれども、関蟬丸神社というのがありまして、逢坂の関所の近くでございます。それを近松寺が支配下に置きます。近松寺が支配下に置くというのは、その上にまた三井寺がのつてくるわけで、一本の支配関係の筋が通ってきます。その近松寺が関蟬丸神社に集まる芸能の人々、説経をする人たちに江戸時代には鑑札を出していました。こういう人たちは全国を動きますから、いわゆる定住した農民ではないですから、いろいろなところへ行くために身分証明書が要るのです。その鑑札を出していたのが、近松寺で、関蟬丸神社とは密接な関係があります。蟬丸の問題は非常に面白いのですけれども、また後で時間がありましたら、若干補足させていただきますと思います。

質問者 A わかりました。

司会 どうも、福家先生ありがとうございました。

報 告

「四天王寺と熊野 熊野街道が結んだ二つの聖地」

北 川 央
 (大阪城天守閣研究副主幹)

司会 それでは、引き続き大阪城天守閣研究副主幹の北川先生にご報告いただきたいと思いま
 す。

北川 ただいまご紹介いただきました大阪城天守閣の北川でございます。所属が大阪城天守閣
 ということで、普段は織田信長や豊臣秀吉の活躍した時代、あるいは大阪城の歴史などについ
 て、調査・研究や展示をしているのですけれども、そちらのほうは私の表稼業でありまして、
 今日のお話のほうは、いわば私の裏稼業とも言っべき分野になります。

私は織豊期の政治史や大阪城の歴史とは別に、中世から近世の庶民信仰史をもう一つの専門
 分野にしております。中でも金毘羅信仰と伊勢信仰について、いちばん多く論文などを公表
 してまいりました。それ以外にも、今日これからお話しさせていただく熊野の信仰ですとか、
 西国三十三ヶ所の観音巡礼とか四国八十八ヶ所の遍路、善光寺の信仰、こういったさまざまな
 テーマについて、これまで研究対象としてきました。そういう関係で、「紀伊山地の霊場と参
 詣道」の世界遺産登録運動にも多少しかかりましたし、登録後の『熊野古道アクションプログ
 ラム2〜世界遺産・熊野古道の保全と活用のために〜』（熊野古道協働会議・三重県）の策定
 にもかかりました。

ところで、この「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録は、私にとってたいへん感慨深
 い出来事でした。私の庶民信仰史研究で長年にわたってパートナーだった方に田中智彦さんと
 いう方がおられました。田中さんは、この大阪商業大学の商業史博物館にも深くかかわられ
 て、紀要に論文を発表されたり、講演やシンポジウムにも出演しておられました。この田中さ
 んは私の大学時代の先輩で、巡礼の用語に「同行二人」という言葉がありますが、まさにその
 言葉のとおり、私たち二人はいろいろなところに一緒に調査に行ったり、互いに知り得た情報
 を交換したり、また研究の方向性や方法論などについて、熱い議論をたたかわせたりして、と
 もに歩んできました。その田中智彦さんは、「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録の学術



調査委員会のメンバーで、ユネスコに提出した文書の原案もこの田中さんが書いたと聞いております。

ところが、田中さんは、世界遺産登録の実現を見る前に、二〇〇二年十二月四日に亡くなりました。亡くなられる前の十日間も非常に精力的に活動しておられて、高知県で開催された国絵図研究会に出席して、それから、徳島県で歴史の道整備活用総合計画策定委員会に出たり、ご自身が所属する岐阜聖徳学園大学でも講義をして、また京都で開催された学会にも参加したりと、ほんとうに多忙な日々を過ごしておられたのです。それが、急に、「風邪気味だ」と言ってお医者さんに行かれたところ、劇症の白血病ということで、入院して翌日に亡くなられました。私にとっては、本当に二度と現れることのない、かけがえのないパートナーを突然、一瞬にして失うことになったのです。

ちょうど田中さんが亡くなられた、この十二月四日という日は、世界遺産登録の申請書が日本の政府からユネスコに送られた、その当日だったと聞きました。お通夜、お葬式も、奥様からのご依頼で、私が取り仕切ってやったのですけれども、そのような事情で、この「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたことは、他の世界遺産登録のときは違って、ひとしお感慨深かったわけです。

その田中さんは、西国三十三ヶ所の巡礼研究で博士号の学位論文を書かれたのですが、田中さんは西国巡礼について次のような主張をしてこられました。西国三十三ヶ所というのは、一番札所的那智山青岸渡寺や二番札所の紀三井寺、三番札所の粉河寺というような、個々のお寺だけが聖地なのではない。それらの札所寺院をつなぐ道、すなわち巡礼路も含めて、全体が大きな聖地なのだ。こういう考え方をずっと一貫して唱えてこられたのです。この田中さんの考え方が、「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録にも反映されたわけです。「個々の神社、お寺だけではなくて、途中をつなぐ道、そこへ向かう参詣道、それらが大きな聖なる空間を構成しているのだ」という考え

方が反映して、「紀伊山地の霊場と参詣道」という世界遺産登録が実現したのです。私はその跡を継いで、では世界遺産になった熊野古道をどうやって活用していくのか、どうやって守っていくのか、そういうことに少しはかわって来たということですよ。今日は後で『小栗判官』のお話があるということですので、先ほどの酒井先生のお話と少しダブるところもありますが、文学作品、主に説経節を通じて、熊野の信仰について考えてみたいと思っております。

皆さんもよくご存じのように、熊野街道というのは、大阪の今の天満橋周辺にかつては渡辺津という港があって、そこが起点となり、四天王寺、それから住吉大社を経て紀伊国へ入り熊野へと向かっていく、そういうルートを通るわけですが、この熊野街道というのは、実は説経節を始めとする唱導文学、唱導文芸の宝庫でもあります。

唱導文芸というのは信仰に導くための文学作品、文芸作品ということです。

例えば、思い当たるところを少し挙げてみましても、大阪市阿倍野区の安倍晴明神社と和泉市・信太山の葛の葉稲荷などを舞台にした安倍晴明・葛の葉のお話がございませぬ。それから、和歌山県の有田市には雲雀山得生寺というお寺があつて、ここは中将姫のお話の舞台になっていませぬ。それから、道成寺も安珍・清姫のお話の舞台であり、先ほど酒井先生のお話にあつた『しんとく丸』、これも四天王寺を舞台にした作品であり、有名な『小栗判官』もそうであります。こういう唱導文芸・文学をたくさん生み出したのが、この熊野街道という道だということです。

今回は熊野の信仰を考える前に、その熊野よりはずつと手前にある、我々大阪の人間としては非常に親しみの深い四天王寺の信仰についてまず考えて、それから熊野の信仰を考え、そして、そこから導き出される中世の庶民信仰というのはいったいどういうものだったのかということに話を進めてまいりたいと思います。もし時間が足らなくなつて、用意してまいりました内容を全て話しきれなかつた場合には、後ほどのパネルディスカッションの中で、その部分を補足させていただきたいと思ひます。それでは、お手元にお配りしたレジュメにしたがつて話を始めさせていただきます。

四天王寺については、もう改めて言うまでもございませぬが、飛鳥時代に聖徳太子が創建した非常に古いお寺です。本来は南大門が正門で、中門、それから五重塔、金堂、講堂が南北に一直線に並び、四天王寺式と呼ばれる伽藍配置になつてゐるわけですから、いま皆さんがお参りになるときは、その南大門から入るのではなくて、たいていはあの石鳥居のある西門から入つておられるはずですよ。

四天王寺の信仰が変わつてしまつたから参詣の入り口まで変わつてしまつたということになつたわけですが、その正門、入り口さえも変わつてしまふきっかけになつたのが、平安時代の中ごろから大流行した浄土信仰です。浄土信仰というのは、死後は阿弥陀如来のまします極楽浄土、西方浄土に往生したいという信仰ですけれども、四天王寺は平安時代以降、この浄土信仰のメッカになるわけです。それで、皆さんもよくご存じだと思ひますが、日想観という行事が四天王寺で行われました。

今も四天王寺の西門から出ると、一心寺の前を下る逢坂という坂がありますが、それを西に行きますと、すぐに松屋町筋に当たります。お寺がずつと並ぶ下寺町がありますが、平安時代頃には、あの松屋町筋辺りが海岸線だつたそうです。ですから、四天王寺から西に行くと、すぐそこはもう海だつたわけですから、その難波の海に夕日が沈んでいく。海を真つ赤に染めながら夕日が沈んでいく。夕日というのは西に沈んでいきますから、あの夕日の沈む西のはるかかなたに阿弥陀さんのまします極楽浄土があるのだということを思ひ浮かべる。夕日を眺めながら極楽世界の存在を思うというのが日想観と呼ばれる行事で、四天王寺の浄土信仰を象徴する宗教行事でした。

平安時代から鎌倉時代にかけて、藤原定家と並ぶ有名な歌人で、『新古今和歌集』を編纂した藤原家隆という人が、従二位という、非常に高い位をなげつって、四天王寺近辺に隠棲しました。これが嘉禎二年といえますから、西暦一二三六年のことです。この藤原家隆は、四天王寺の付近に「夕陽庵」という庵を営んで、そこで死を迎えるわけです。彼が隠棲した翌年、嘉禎三年四月九日に、彼はこの夕陽庵で亡くなっています。このときに三首の歌を詠んでいるのですが、そのうちの一つをレジユメに挙げておきました。

「契りあれば 難波の里に 宿り来て 波の入日を 拝みつるかな」（『古今著聞集』）。難波の海を真つ赤に染めて沈んでいく夕陽を眺めながら、彼は往生を遂げたのです。そしてこれ以降、四天王寺周辺の地が「夕陽ヶ丘」と呼ばれるようになったと伝えられます。

レジユメの三枚目に『一遍上人絵伝』に描かれた四天王寺付近の様子を付けておきました。一遍上人ですから、鎌倉時代の四天王寺の様子が描かれていることとなります。レジユメの右側が四天王寺の伽藍です。右に門がありますけれども、その向こうに五重塔や金堂の建つ主要伽藍があるわけです。鳥居の建つのが西門ですが、まだこのときは石造りになっていません。これからのち、忍性が別当をつとめた永仁二年（一二九四）に石造りにあらためられました。これが現在の鳥居です。

さて皆さん、この鳥居の右上にある木のところにいる人に注目していただきたいと思います。目隠しをして、両手を前に上げて歩いていきます。他にも同じようなことをやっている人が何人もいます。熊野の那智では観音さんのいる浄土、すなわち補陀洛浄土を目指して補陀洛渡海というものが行われましたけれども、この四天王寺では、阿弥陀さんのいる西方浄土へ向かって入水が行われました。『一遍上人絵伝』のこの部分は、その様子を描いたものです。

私たちはふつとお寺にお参りをすると、信仰・礼拝の対象はお堂であり、そこに安置された仏像であるわけですが、ここに描かれた人々は四天王寺に向かって拜んでいるわけではありません。四天王寺の伽藍に背を向けて、西のほうを向いて拜み、歩んでいます。皆、金堂や五重塔といった四天王寺の伽藍に向かって拜んでいるのではなくて、西の海に向かって拜んでいます。本来、私たちが拜むお寺のお堂には逆にお尻を向けて、西の海を拜んでいるという事実です。要するに、彼らにとって聖なる場所は四天王寺ではなくて、夕日の沈む西側の海だったということです。もちろん、四天王寺が建てられた当初は伽藍そのものが聖地だったのですが、浄土信仰の隆盛によって、お寺が彼らの信仰対象ではなくなり、西方はるかかなたの極楽浄土へとつながる海が信仰対象になったのです。

そして、四天王寺西門の鳥居、今は石造りになっていますが、その鳥居には「釈迦如来 転法輪所 当極楽土 東門中心」と書かれた額が掛けられています。現在も四天王寺に行って、鳥居を見上げていただいたら、これらの文字が書かれた額が上がっています。ただし、もともとの

物は宝物館に納められていて、今の物は新たに作り直されたものですが、ここに記された文字の意味するところを、「ごく簡単にいうと」「ここが極楽の東門の中心ですよ」ということです。四天王寺にとっては西門であるけれども、極楽から見ると東門である。要するに、極楽はこの鳥居の西側にあるということです。「その極楽の東の入り口にあたりますよ」と書いてあるのです。この額に記された文言からしても、聖地が四天王寺というお寺ではなくて海側にあったということがよくわかります。

では、説経『さんせう太夫』を見ていきたいと思います。先ほど酒井先生が概略をお話しされましたけれども、もう一度繰り返しておきますと、丹後国の由良、現在の宮津市の由良というところに人買いのさんせう太夫という人がいて、ここに安寿とづし王の姉弟が買われてきました。そして、毎日毎日大変な労役を課されて苦しむわけですけれども、あるとき、山の中の仕事を言い付けられたのを機会に、姉と弟は作戦を立てて、脱出を試みました。姉の安寿は自らの身を犠牲にして、弟のづし王だけを逃すことに成功します。づし王は丹後国の国分寺に身を寄せて、その国分寺にかくまわれます。

そして、この国分寺のお坊さんに背負われて、づし王は京都の朱雀権現堂までやってきます。ここでづし王は国分寺のお坊さんと別れるわけですが、づし王はそれまでにさまざまな精神的苦痛や肉体的苦勞を重ねた結果、足腰の立たぬ身になっていて、彼は土車に乗せられて四天王寺にやってまいります。そのシーンがレジユメに書いた場面です。

づし王が四天王寺の西門にやってくるシーンで、「あらいたわしや、づし王殿は石の鳥居に取りついて、えいやつと言つて御立ちあれば、御太子の御はからいやら、またづし王殿の御果報やら、腰が立たせ給いける」とあります。

づし王は足腰の立たない身で土車に乗せられて四天王寺にやって来たわけですけれども、西門の石鳥居に取りついた瞬間、彼はよみがえるわけです。足腰の立つ、元の体に復活を遂げたということが記されています。結局、づし王はこののち四天王寺で京都の公家梅津院という人に見いだされて、再び父祖の領地であった奥州五十四郡のあるじに返り咲き、そして、自分たち姉弟を大変な目に遭わせたさんせう太夫に復讐を遂げるといふストーリーになっているわけですけれども、ここで注目したいのは、四天王寺のどこが聖地とされているかということなのです。

先ほども言いましたように、創建当初は四天王寺の伽藍が聖地でした。それが、浄土信仰の隆盛によって海が聖地になります。その時点では、西門の鳥居は極楽への東の入り口に過ぎなかつたわけですが、この話では、西門の石鳥居そのものが聖地になっています。これに取りつくことによって、づし王は復活を遂げます。あの扁額の掛かつた石鳥居自体が聖地として認識されるようになったということなのです。

ところが、さらに時代が下って江戸時代になりますと、聖地と認識される場所がまた移ります。次に見るのは、近世、江戸時代の浄瑠璃『撰

州合邦辻』です。先ほど、一心寺の前の逢坂を下ると松屋町筋にぶつかると言いましたけれども、この松屋町筋と逢坂がぶつかるあたり、その少し西側が合邦辻と呼ばれた辻で、そこに閻魔堂が建てられました。『摂州合邦辻』には、その閻魔堂の話が出てまいります。

「西門石の鳥居脇に建立の閻魔王、一銭、二銭の多少によらずお志はござりませぬかな。ござりませぬかな。たった一文か二文で、閻魔様に近付きになって置くは徳(得)なもの」「当極楽土とあるからは、この天王寺は直に極楽」「実(味)方があれば敵役もある。鬼があればこそ仏もある。畢竟地獄は極楽の outlet。其 outlet の番頭はこのわる。番頭の氣に入って置かずば、本家の極楽へ何と出入はなるまいがの」。

この時点では四天王寺の伽藍が極楽浄土になっていることがわかります。もともと平安時代には海が極楽浄土でした。それが、西門の石鳥居が極楽浄土になって、今度は伽藍が極楽浄土になっています。皆さんは、四天王寺の伽藍のすぐ近くに亀井というのがあるのをご存じですか。毎日、経木流しが行われています。あれは、亡くなった人の戒名を書いて、亀井の中に入れ、流してもらうのです。なぜあのようなことをやっているかといいますと、あの亀井の水は伽藍の下にある青龍池という池につながっているといわれ、亀井で、経木を流してもらったら、亀井から水脈を遡って亡くなった人の魂が伽藍の下の青龍池にたどり着くと信仰されているからです。そして、その青龍池はさらに極楽浄土につながっているというのです。要するに、あの四天王寺の伽藍のはるか奥底に極楽浄土があるという信仰に変わってしまったわけです。

それで、『摂州合邦辻』では、「みな四天王寺にお参りして、極楽往生したい、極楽往生したいとお願いするけれど、四天王寺さんに頼むだけではあきません。地獄へ落とすか極楽へ往生させるか決めるのは閻魔さんでせ。四天王寺さんに頼んでも、そんなのあきません。閻魔さんに頼まなあきません。一文や二文のわずかな金で閻魔さんにお近付きになって、死んだときにええ判断を下してもらったら得ですやろ」と、そういうことを語っているわけです。こうやって合邦辻に閻魔堂というのが出来上がったというのです。

もともと合邦辻の閻魔堂がある場所は、先ほども言いましたように、一心寺の前の逢坂を下った西側ですから、かつては極楽と認識された海の中にあたります。ところが、江戸時代になりますと、極楽のほうは四天王寺のほうへやってきて、かつては極楽に続いてきた海があった場所が閻魔さんのすみかになってしまいました。海が西へ、西へとどんどん遠ざかったことも関係あるのですが、聖地と認識される場所が時代とともに入れ替わりました。

それではそろそろ、熊野のほうに話を移していきたいのですが、熊野詣といえますと、本宮・新宮・那智、この三つの熊野、すなわち熊野三山へお参りすること一般的なには考えられているのですが、これら三山に向けられた信仰は必ずしも対等ではありませんでした。やはり何と云って本宮なのです。熊野詣の最大の目的は熊野本宮に行くことであつたわけです。

本宮は、現在は熊野本宮大社という神社で、家津御子という神様をまつています。新宮は熊野速玉大社で、祭神は熊野速玉神。那智は熊野那智大社で、熊野夫須美神という神様をまつています。ところが、当時は神仏習合の時代でしたから、新宮の速玉神は薬師如来、那智の夫須美神は千手観音が、それぞれ本地仏だと考えられるようになります。それに対して、本宮の場合は阿弥陀如来とされました。熊野詣というの、実は四天王寺と同じように、阿弥陀さんのまします熊野本宮へ行くことが最大の目的であったということです。

また『一遍上人絵伝』になりますが、『一遍上人絵伝』には「熊野成道」という部分が出てまいります。一遍上人というのは、時宗を開いた偉いお坊さんですけども、この人は賦算といって、念仏札を配り、わずかな見返り、喜捨を得て、各地を遍歴していました。そして、彼は熊野へも向かったわけですけども、その途中で理屈っぽいお坊さんに出会うわけです。

この理屈っぽいお坊さんは、「わしは念仏信仰の気持ちなど起こらない」と言って、念仏札の受け取りを拒否しました。今までみな気前よくもらってくれたのに、このお坊さんはもらってくれなかった。それで、一遍上人は非常に深い宗教的な悩みに陥るわけです。そして、彼は熊野の本宮へたどり着きまして、当時、証誠殿と呼ばれた熊野本宮に参籠をし、お通夜をします。その夢の中に熊野権現が現れて、一遍上人に宗教的な教えを示唆するのです。それがこのシーンです。

「融通念仏すゝむる聖、いかに念仏をはあしくすゝめらるゝぞ。御房のすゝめによりて、一切衆生はじめて往生すべきにあらず。阿弥陀仏の十劫正覚に、一切衆生は南無阿弥陀仏と必定するところ也。信不信をえらばず、浄不浄をきらわず、その札をくばるべし」。その人が信じるとか信じないとか関係なく、その人が高貴な人だとか身分の卑しい人だとか関係なく配りなさい。あなたが勧めたから一切の衆生が初めて往生するというわけではない。だから、その人が信仰するか信仰しないか、そういうことは関係なく、あなたはただお札を配ればいいのだ。こういう宗教的な啓示を受けたことが、一遍にとっては、僧侶としての人生において非常に重要な画期になったので、時宗ではこの出来事を「熊野成道」、すなわち一遍はここで宗教者としての確信を得たというふうに呼んでいるわけです。この熊野権現が語ったという「信不信をえらばず、浄不浄をきらわず」という言葉は、熊野の信仰を理解する上で非常に重要なキーワードです。

熊野の本宮大社のすぐ近くに熊野九十九王子の一つで伏拝王子がございますが、平安時代の歌人として有名な和泉式部がそこまでやって来ますと、突然月の障りが始まります。それで、彼女はすごく残念がるわけです。せつかくこまでやって来たのに、月の穢れになった。女性の穢れというのは血の穢れということで忌み嫌われたわけですけれども、それが始まった。そこで、和泉式部が嘆いて歌を詠むわけです。「晴れやらぬ 身のうき雲の たなびきて 月のさはりと なるぞかなしき」(『風雅和歌集』)。ここまで来たのに、月の障りのために熊野本宮へのお

参りができず悲しいと。

ところが、その和泉式部に熊野権現が歌を返したというのです。「もろとも塵にまじはる 神なれば 月のさはりも なにかくるしき」(同)。熊野では血の穢れなど関係ない。月の障りが始まろうと遠慮なくお参りすればいい、この歌もやはり先ほどの「信不信をえらばず、浄不浄をえらばず」と言つ言葉と、同じ意味合いを示しているのであって、熊野が多くの人々に信仰され、多数の参詣者を集めた理由がわかります。

平安時代後期に盛んに行われた熊野詣では、上皇や公家といった男性だけではなく、女院をはじめとする多数の女性たちも熊野参詣を果たしました。これは、他の霊山ではあまり考えられないことです。多くは女人禁制をとっていたからですが、熊野はそれらとは違って女性をも拒否しなかったのです。ですから、多数の女性も熊野にお参りしました。そうした熊野信仰の本質が、一遍の「熊野成道」の話と、和泉式部の和歌問答からうかがえるわけです。

続いて説経『小栗判官』を見たいと思います。先ほど酒井先生のお話で説経『小栗判官』が出てまいりましたが、ここでもう一度粗筋をお話しておきますと、小栗判官という人は二条兼家という京都の公家の御曹司だったのですが、粗暴な振舞いが高じまして、お父さんに常陸国に追放されました。ところが、そうなっても彼の粗暴な行いは一向に改まることはなく、相模(現在の神奈川県)の郡代を務めた横山家というところに押し入りまして、その娘の照手姫と強引に契りを結んでしまいます。

それを知った郡代横山は非常に怒り、小栗判官と従者十人、全員を毒殺してしまいました。ところが、従者十人が閻魔大王に「自分たちはこのまま地獄に堕ちてもいい。でも、我があるじだけは何とかよみがえらせてほしい」と嘆願をしまして、小栗判官はこの世によみがえってくるわけです。けれども、残念ながら元の姿ではなくて、物も言えず目も見えぬ、餓鬼の姿でこの世によみがえります。そして、相模国・藤沢の遊行上人、これは一遍が開いた時宗の本山・清浄光寺の上人ですけれども、この遊行上人の計らいで、土車に乗せられ、首から札を下げてもらいます。この札に遊行上人は「此くるまを引くものは、ひとひき引けば千僧供養、万僧供養に成るべし」と書いてくれたのです。要するに、「この土車を引っ張ってやったら、千人の僧、万人の僧に供養をしたのと同じ意味合い、同じ功德がありますよ」と書いてくれたわけです。おかげで小栗判官は熊野までやって来ます。熊野の湯峯に着くところが、この一節です。

「湯の峯につけ給へと、ゑいさらゑいと引く程に、堺の浜を引き過ぎて、和泉の国に車つく。急ぐに程なく紀の国に聞へたる。かぶるの宿につきにけり、是より車にてはかなはじとて……」。中辺路に入るともう車を引いてはいけませんので、「ここからは」籠に入れ負い、程なく湯の

峯に御出ありて、小栗を介錯かいしやくし給ふ」。介錯というのは世話をするという意味です。

「一七日、七日間、湯の峯のお湯に」お入りあれば、耳も聞へ、眼も見ゆる。三七日と申すには、本の小栗と成り給ふ」。二日間入ることで、もとの小栗に復活をしたわけです。「小栗夢のさめたる心地にて、是はまさしく熊野の三つの御山と覚へたり。ありがたやと伏し拝み給ふ」といふうちに、見事によみがえったわけです。そして、小栗判官は青墓宿（現在の岐阜県大垣市）の遊女屋で下働きをしていた照手姫と再会し幸せな生涯を送った、そういうお話になるわけです。

先ほどの『さんせう太夫』と非常によく似た構成であることがわかりますでしょうか。土車に乗せられ、引かれてきた人が復活を遂げる。熊野の場合はその場所が湯峯温泉であり、四天王寺の場合はそれが西門の石鳥居であったということです。この二つの聖地は同じような信仰を持っていたということがよくわかります。そのことは、もう一つの説経『しんとく丸』を読むことでさらによくわかります。

この『しんとく丸』というのは、これも先ほど酒井先生がおっしゃったように、河内国の高安郡を舞台にした話で、しんとく丸が四天王寺に向かったとされる道は俊徳道といわれ、現在も地名・駅名として残っています。熊野街道を小栗街道と言つのと同じで、このしんとく丸がたどった道を俊徳街道、俊徳道と呼んでいます。

さて、この『しんとく丸』のお話ですが、主人公のしんとく丸は高安郡の信よし長者という人の御曹司でした。ところが、自分を生んでくれた実のお母さんが亡くなり、継母がやって来ます。そして継母にも子供が生まれ、彼女は我が子に跡を継がせたいと思っわけです。そのためには、当然しんとく丸が邪魔になります。継母は、夫である信よし長者にしんとく丸のことを讒言ざんげんしました。その結果、しんとく丸は父によって追放されるのですが、その上継母の呪いによって業病に苦しむこととなり、四天王寺の境内に捨てられました。

しんとく丸は、夢のお告げを受け、熊野の湯峯に向かいます。途中、和泉国の近木庄（現在の貝塚市）で、立派なお館に立ち寄って物乞いをするわけです。ところが、業病に取りつかれたしんとく丸は、その醜い容姿を館の人々にあざ笑われるのです。

そして、しんとく丸は、その館が、実はしんとく丸の許婚いいなすけであった乙姫の館であることを知り、愕然とします。あざ笑われたことがとにかく屈辱的で、恥ずかしくもあり、嫌になつたしんとく丸は熊野に行くことをあきらめて、もう一回、四天王寺に戻ってきます。そして、四天王寺の縁の下で餓死することを決心します。ところが、一方の乙姫は、我が許婚のしんとく丸を捜し求めて四天王寺にやって来るのです。ここで二人は劇的な再会を果たします。そのシーンが次の場面です。

「乙姫かっぱと起き給ひ、あらありがたの御夢想や、と御前三度伏し拝み、御下向なされるれば、一の階いひに鳥鶯うづらのありけるを……」。四天王寺

に鳥箒というものがあつたのです。これを拝借いたしました。「たばかりで下向申し、はにぶの小屋に下向あり、しんとく丸をひつたて、上から下、下から上へ、せんさいなれ、と三度撫でさせ給へば、百卅五本の釘はらりと抜け、もとのしんとく丸にお成りある」。

四天王寺にあつたこの鳥箒というものを使って、上から下、下から上へと三度体をなでてやると、彼にかけられた呪いが釘となって刺さつていたわけですが、これが体からはらりと抜けまして、もとのしんとく丸になって、二人は無事、長者夫婦として幸せな生活を送つたという、そういうお話です。要するに、しんとく丸は復活を願つて、いったんは熊野に行こうとしたものの、それをあきらめた。けれども、四天王寺に戻つたことによつて復活を遂げることができたということで、このお話からも熊野と四天王寺とが同質の信仰を持つていたということがよくわかります。

実はこれは四天王寺と熊野に限つたことではなくて、中世において聖地というものがどういう場所として認識され、中世の庶民信仰というものがいつたいいかなるものであつたのかという、もっと大きな、本質的なこととかかわつてまいります。またこうした点につきましては後ほどパネルディスカッションのほうでお話しさせていただきたいと思ひます。ご静聴ありがとうございます。（拍手）

司会 北川先生、どうもありがとうございます。

報 告

「立ち枯れる世界遺産の森・大峰山脈」

前 圭 一
 (大阪経済法科大学教授)

前 ただいまご紹介いただきました大阪経済法科大学の教授をしております前です。

今回のこのシンポジウムは、「巡る祈りの文化」というタイトルになっているわけですが、このテーマと私がこれからお話しする内容がちょっとそぐわないかなという感じはするのですが、修験道の霊場であり修験の場であった大峰山脈の自然が、今、大きく変わってきているということをお話ししようと思います。そういうことについて皆さんに知っていただくことも、それなりに大きな意味があるということで報告をさせていただきます。

私の肩書は大学教授ですが、今日は自然科学とか専門的な話をするわけではありません。私は、一九七三年から登山を始めまして、三十数年間、登山をしています。今も現役で登山をしています。大学院生の時から社会人の登山団体、奈良県勤労者山岳連盟に所属して登山をしてきました。特に私が気に入っているのは奈良県の山で、大峰山脈と台高山脈です。

奈良県を南北に走る山脈は二つありますが、一つは三重県と奈良県の県境の台高山脈といまして、高見山からずっと南のほうに伸びて、ほぼ県境に沿って行って、いわゆる大台ヶ原から尾鷲の方へ抜けていきます。もう一つが、吉野山から近畿最高峰の八経ヶ岳を経て、玉置山、そこからさらに南に延びていく大峰山脈です。これらは「近畿の屋根」と言われていますが、この二つの屋台骨の山脈が走っています。

山頂をめざす登山が一般的ですが、川の源流を登る沢登りというのがあります。台高山脈にしても大峰山脈にしても、非常に変化に富んだ渓谷がいっぱいあります。そういうところを、特に夏場に川の渓谷部を、源流に向かって登っていくという、そういうことに魅入られます、ずっと続けてきているわけです。

やはり沢登りというのは、そこに原生的な自然があるということが一番の魅力ですが、沢登りしている中で、伐採されている状況を目の当たりにして非常にショックを受けました。「これは何とかしなくてはいけない」というふうに思っています。そこから、登山を通じてこの山岳

地域の自然保護に関心を持って、実際の保護の取り組みもやっています。

そういう中で、大峰山脈が非常に変わってきているといいますが、原生的な自然が失われてきているということ強く感じてきています。そこで、この大峰山脈の自然破壊と保護の取り組みということを最初に話します。大峰山脈を含めてこの紀伊半島のかなり広い地域が吉野熊野国立公園ということになっています。

ここでぜひ皆さんに知っていただきたい人物がいます。この吉野熊野国立公園という広大な国立公園ですが、それが国立公園になったのは一九三六年ですけれども、この国立公園に指定されたときに、国立公園を設立するというでもものすごく尽力をした人がおられるのです。

吉野群山というのですが、大峰山脈や大台ヶ原などの地域をくまなく歩いて、その素晴らしさを知って、これはぜひ国立公園にしたいということで尽力された方が、今の吉野の下部に六田というところに実家があった岸田日出男さんです。今はもう亡くなれましたが、この岸田さんは「吉野熊野国立公園の父」というふうに言われております。三つの県にまたがる国立公園を設立するということで、非常に尽力されました。

そのおかげで現在の吉野熊野国立公園があるということで、私もこの岸田さんについて少し調べました。『大峰山脈・大台ヶ原』（ヤマケイ関西）という雑誌に「吉野熊野国立公園の父・岸田日出男」という一文を書いて紹介していますが、本当に全身全霊を尽くして国立公園化することに尽力された方です。

そういう人のおかげで国立公園ということになっているわけですが、この吉野のところは、吉野林業の中心地なのです。スギやヒノキという人工林が植えられているところと地域が重なってくるのです。そういうことで、実はこの大峰山脈も、国立公園になったからといって、自然がそのまま守られているということはありません。戦前・戦後を通じて、原生林の伐採が大規模に続いていきます。逆に言えば、「原



生林と言えるようなものは大峰山脈の稜線部にわずかに残っている」というふうに言い切っているのではないのです。いかという状態で伐採が進みます。特に戦後、昭和三〇年代以降ぐらいいから、拡大造林ということで、スギやヒノキの人工林化が進みます。そして、製紙会社による原生林の伐採がどんどん進んでいくという状態が起きていきます。

そういう中でも保護の取り組みがされてきた部分もあるわけですが、例えば一九七〇年代の中頃ぐらいの白川又林道反対運動です。大峰山脈には三つの素晴らしい渓谷があると言われています。そのうちの一つが白川又谷で、近畿最高峰標高約二〇〇〇メートルの八経ヶ岳という山がありますけれども、そこに突

き上げる渓谷です。そこに奈良県が林道をつけたわけですが、これがひどい林道で、削り取った土砂を全部谷に捨てまして、ある滝なんかは、滝そのものが埋まってしまつたという、すごくひどいことをやっていたのです。今はそんなことはどこもありませんけれども、そういうふうなことがあって、これの反対運動なんか私もかなりやったのです。

こういう取り組みとが、それから一九九〇年代の後半ぐらいから、八経ヶ岳の中心部に鹿の防護柵を設けられました。オオヤマレンゲという非常に素晴らしい花なのですけれども、これが鹿にことごとく食われてしまつたということがありまして、これを何とか守るということで環境庁や奈良県が防護柵を設けました。

そこで、これから「立ち枯れ」という問題についてお話をします。

何枚か写真を用意しました。まずこれは、いわゆる大峰山脈の縦走路です。前鬼の宿坊から上がったところで太古の辻（写真①）というところですが、そこから南を南奥駈、北を北奥駈と言います。その南奥駈道を南へ下がったところには、まだこういう原始的な森（写真②）が見られます。

それから、これは大峰山脈の渓谷の一つ（写真③）です。去年に沢登りをしたのですが、非常に厳しい沢です。こういふすばらしい渓谷がたくさんあります。大峰山脈の魅力としては、こういう原生林の森のあること、そして、変化に富んだ渓谷が見られることです。

これは南奥駈で撮ったシャクナゲの大木（写真④）ですけれども、もう見事に咲いている状態です。シロヤシオとかツツジ系統ですけれども、そういうのも見られます。それから、「天女の花」と言われるオオヤマレンゲです。これが、かつては八経ヶ岳とかその周辺にいっぱい見られたのです。これもことごとく鹿にやられて、ほぼ全滅に近い状態という現状です。

それから、八経ヶ岳からずっと北のほうに行ったところの大普賢に突き上げる沢では、冬にすばらしい氷瀑群が見られます。

それで、大峰山脈の最高峰八経ヶ岳ですが、私が三十数年前に登った時の状況ではシラビソという亜高山帯の針葉樹の純林だったのですが、黒っぽく見える森の中に白く帯状に枯れている立ち枯れの部分が見られました。

それが今はどういう状態になっているかといいますと、白くなっている帯状の部分はもう倒れてなくなりました。はげ山状態になっています。八経ヶ岳の手前に弥山という山がありますが、八経ヶ岳に行く間は、立ち枯れが猛烈に見られます。そして、弥山小屋の周り一体が、見事に枯れています（写真⑤⑥）。

八経ヶ岳からさらに南のほうに行ったところの明星ヶ岳の山頂付近（写真⑦）が集中的に枯れています。

それから、八経ヶ岳と弥山の間突き上げる弥山川の源流部ですが、ここで崩壊（写真⑧）が見られます。立ち枯れで根がもたなくなつてくと、どんどん崩れていくというふうに見ております。

それから、弥山川を突き上げると、八経ヶ岳と弥山の間の中に出てきます。ここには「オオヤマレンゲ自生地」という石碑が建っています（写真⑨）。「自生地」とあつてもここには何もありません。ここもかつては、もうオオヤマレンゲがわんざとあつたところです。そういうところが、もうこれだけが建つていて、「跡地」と書いたほうがいいのではないかと思うのです（笑）。本当に、これは冗談ではなく、こういう状態になっているのです。

そこで、環境省とか奈良県が、その対策事業ということで、フェンスを設けて鹿を入れないようにしています（写真⑩）。オオヤマレンゲは鹿が食っているのははっきりしているのです。それで、それを守るためにということですが、この中は守られているし、オオヤマレンゲも咲いています。

あと、奥駆道を南下していくとどういふ状態になっているかということですが、釈迦ヶ岳へのアプローチルートに古田の森といってブナのうっそうとした森があつたというところですね、これは今もうほとんど衰弱したブナばかりです（写真⑪）。さらに、太古の辻もさみしいという状態です。ここをさらに南に行きますと、剣光門というところは、何か原っぱみたいな状態になっています。特別ひどいところはばかり写しているとは思わないのですが、こんな状態になっています（写真⑫）。

それで、今から十年前に大峰の立ち枯れについてマスコミで記者会見したら、登山をやっている新聞記者が「一回見に行きましようか。写真を撮るから」と取材を申し込んでくれたのです。一緒に行って、大きく取り上げてくれました。「森が死んでいく」という見出しです。

八経ヶ岳周辺はシラビソの純林ということで国の天然記念物になっています。仏経ヶ岳原始林です。このシラビソがずっと枯れています。しかし、枯れっぱなしかといえますと、あるところに行くと、モミ、トウヒの幼樹はけっこう生えています。その幼樹をまた鹿が食っているわけです。そういう状況があります。

私たちはこういう現状を調査しようということで、一九九八年からずっと十年間ぐらいにわたって大峰山脈の立ち枯れ調査をしてきました。二〇〇四年の秋に『立ち枯れる世界遺産の森』という立ち枯れ調査報告書をまとめました。この報告書では、弥山が虎刈り状態になっているところか、鹿が樹皮を剥いている写真と林野庁の調査や植物学の雑誌からのコピーなどの資料を付けて出しました。

立ち枯れの特徴として、いくつか挙げることでできるのではないかと思えます。一つは、いわゆる針葉樹の立ち枯れです。シラビソとか毛



⑨ オオヤマレンゲ自生地の石碑



⑩ 鹿の防護フェンス



⑪ 古田の森のブナ



⑫ 剣光門

毎日新聞夕刊
1997年12月8日





① 大古の辻



② 南奥駈道の原生林



③ 大峰山脈立合川溪谷



④ 南奥駈道のしゃくなげ



⑤ 弥山小屋付近の立ち枯れ



⑥ 弥山小屋付近の立ち枯れ



⑦ 明星ヶ岳の立ち枯れ



⑧ 弥山川源流部の崩壊

ミ、トウヒといったものが集中的に立ち枯れを起こしています。シラビソの立ち枯れについては、これまで専門家は「縞枯れ」という言葉を使っていました。帯状に枯れていきます。これは、そのまま枯れていくのではなくて、枯れたら順繰りに次のところが枯れていく。何年かたつたらまた元のところが循環的に回復していくというわけです。そういう特徴を持った山もあります。

この八経ヶ岳とかそのあたりのところでも、弥山とかを見えますと、そういう縞枯れ状態と思われるところがあるのです。ところが、縞枯れでは説明できない部分、枯れてしまって、幼樹も育っていない所があります。八経ヶ岳の山頂付近を見ますと、もうシラビソが生えてきていないのです。カエデ類とか、別の植生に変わってしまっている所があります。これはもう、縞枯れ説が成り立たない状態へ来ているのではないかと、いうふうに見ています。

それから、二つめに、オオヤマレンゲがほぼ全滅状態になっています。鹿から守るフェンスの中とか、もっと別の場所では、まだ、そこそこ見られます。

それから三つめに、冷温帯林であるブナが非常に衰退しています。私も登山をやっていますから、全国の山に登って、ブナの状況を見ていますが、例えば、福島県の飯豊連峰や各地のブナを見ておきますと、本当にたくましいのです。大峰のブナというのはもう非常に貧弱で、枝ぶりがよくない。普通、太平洋側のブナというのは、こう横に枝が張っています。しかし大峰では衰れたブナを見ているわけです。ただ、大峰山脈で南奥駈をずっと南のほうに行きますと、すごく立派なブナもあるのです。これはどう考えたらいいかというふうなことです。

結局、大峰山脈は今ももう疎林の状態というふうにも言えるようなところが多い状態です。かつては原生林に覆われていたような部分が、もうまだらにしか見られないというふうなところが増えてくることが多い状態です。やがては、悪くすればげ山になっていくか、今までの植生ががらりと変わってしまう可能性があるというふうに見ています。

それから、四つめに鹿による剥皮です。皮を剥いでいく。ただ、鹿もブナなんかの皮は剥ぎません。どうも好きな木があるようなのですが、それはシカに聞くシカ、シカたがないというふうに通うのです（笑）。まあ、おやしギヤグですけれども、そういうふうには、鹿がいくつかの、モミとかトウヒとかシラビソ、これをもつ集中的に剥いでいる。それで枯れていくというふうなことが結構あります。幼樹は育っていますが、それをまた鹿が食っているという悪循環になっています。

立ち枯れの原因ですけれども、これは、確定はしていません。今まで縞枯れ説というのがありましたけれども、それだけでは説明できない部分があります。結論だけ言いますと、どうも酸性雨や酸性霧、これが主な原因ではないかというふうな考えられます。酸性霧、酸性雨、これは

どこから来るかといえますと、大都市部の大阪ですね。大阪の、特に車です。工場側での規制はかなり強まりましたから、主に車の排気ガスです。これが上へと上昇して、そして近畿で一番高いところにぶち当たって、高いところが枯れてくるという可能性が非常に高いのです。そういうふうな仮説を唱えている学者がいますが、僕もそれはうなずけるということですよ。

それから、鹿が皮を剥いている。では、鹿が増えたのかどうかですが、これも、大台ヶ原では少し調査をされていますけれども、大峰は全くされていないのでわかりません。ただ、全国的に言っても、鹿はもうどんどん増えているのははっきりしています。奈良県だけで、年間一六〇〇頭くらい鹿を捕殺しています。北海道にいたってはもうエゾシカが増えすぎて、缶詰めにして売り出しているという、こういう状況になっています。なぜ鹿が増えているのかというのは、これもまだ確定はしていません。地球の温暖化が影響している可能性が高いです。鹿がなかなか死なないということですよ。さらに、周辺地域の原生林の伐採も影響をしているという可能性はあるということにとどめておきます。

最後に大峰山系の地域整備計画という問題について、少し触れて終わりにしておきます。ユネスコの世界遺産になったということは、大峰山脈の文化遺産として、修験道の伝統を保持しているところが認められた結果です。世界遺産は保護が前提なのです。ところが、世界遺産になったということで、人を呼び込めるといふことを考えたのでしょうけれども、奈良県は自然共生計画とか何とかえらく耳障りの良いことを言って、報告書を出して、「整備する」というのです。

弥山には例えば公衆トイレがないのですけれども、そこにすぐテラックスなトイレを造って、そこからモノレールですつと下の林道まで運んで、処理するという、こういうふうな計画です。キャンプ場を設けるとか、駐車場を設けるとか、そういう計画が出されました。この奈良県の計画を受けて、今度は環境省が環境省の計画として、この大峰山系地域整備基本計画というのをまとめました。これが基本計画案でして、四五の整備計画があります。

こんな計画の中には過剰整備というか、いらぬことをいっばいやろうとしているという部分があるのではないか。それで僕は新聞にも一文を載せてもらいましたが、こういう計画が進むことに対して、ちょっと問題があるのではないかと指摘しました。環境省がまずやることは保護であって、そんな整備計画をして人寄せすることではないと。世界遺産になって良くなったことはまずないのです。世界遺産になると人がたくさん来て荒れるだけです。これはどこでもそうです。抜本的な保護管理計画、特に立ち枯れについてやるのが大事だと思うのです。

そういうことで、この修験道の対象になってきた修験の場がどういふふうになっているかということは、今回のシンポジウムのテーマを考える上で決して無視できない問題であるということ、あえて報告をさせていただきました。以上で終わらせていただきます。(拍手)

司会 前先生、どうもありがとうございました。

「説経浄瑠璃小栗判官・矢取りの段」テープ（三代目若松若太夫語り）

酒井 これからお聞きいただくのは、先ほどの北川先生の解説の延長になりますけれども、小栗判官が冥土に落ちる。そして、閻魔大王の前で「まあまあ帰れ」ということで娑婆へ戻って、時宗という宗派の藤沢の遊行寺というお寺があります。その上人の下に帰ってきたけれども、餓鬼になっている。それが、今度はその閻魔大王の自筆で「この者を熊野の湯峯温泉へ行つてほぐせよ」と。

湯峯の温泉に入られた方はいらっしゃいますか。ああ、私もそうです。いい温泉ですね。ちゃんとおかみがいさつに來られますね。おかみがやはり礼儀を尽くすというのがあの地域の特色です。泊まられたのは東屋、あづまやさんですか。今日おいでになっていますけれども、三重県の紀和町（現熊野市）の教育長・久保幸一さんに、町史の編さんであのあたりを詳しく案内していただいたわけですが、小栗判官も、湯峯の温泉に入つて元気になつて出てくると、こういう話になります。

これから聞いていただくのは、お手元の資料で「七八ページに」というのがございますね。この話の概要、その下の段のところから始まります。といいますのは、大変長いので前段はもう全部省略して、七八ページ下の段の四行目、「こうして小栗は、大阪天王寺、住吉明神を通り熊野へ行き、これ四十と九日、七七・四十九日の湯治で本復する」。病気が治って立ち上がるということです。そして、雄々しい姿になつてくるけれども、死んだはずの小栗が生き返つたとは信じられないというので、その矢取りの技を持っているかどうかを試す場面になります。

ちよつとお断りいたしますが、我々の聞いている芸能は、かなり洗練されています。例えば、文楽でもそうです。文楽の基礎になる浄瑠璃もそうです。それから、発展した浪花節だつてかなり進んでいます。ですから、それに比べるとちよつとテンポが遅い感じがします。時代がゆっくり動いていますので。我々の時代はものすごく慌ただしいです。

話がちよつと脱線しますけれども、フィンランドに行つた人が言うのに、フィンランドのエレベータには「開く」というボタンがあるけれども、「閉まる」というボタンがありません。人がはさまりそうになったら開けるだけです。閉まるのはある時間で閉る。ただ日本人は、もう乗つた途端から閉めかけているでしょう。ああいう生活をしている我々から見れば、これから聞いていただく音楽は非常にまどろっこしく聞こえます。だけれども、後半になるほどグーツと盛り上がってきますので、お聞きいただいたらと思います。それでは、よろしく願います。

パネルディスカッション

コーディネーター 酒 井 一
 パネリスト 福 家 俊 彦
 北 川 央 一
 前 圭 一
 (順不同・敬称略)

酒井 「質問がもし出ますと、五時十分をちょっと過ぎるかもわかりませんが、このご予定でお願いしたいと思います。

今日のお話は非常に幅広いものがありまして、今日のテーマの世界遺産について考えますと、熊野を中心にした高野山とか大峰、吉野を巡る、こういう宗教的な色彩の強い世界文化遺産は極めて日本的な遺産だと思います。最初のシンポジウムときに申し上げたのですが、世界各国から異なった宗教の人が来て、そして、それぞれの地域が生んだ宗教に対する、あるいは文化に対する理解の下にユネスコが判断しています。一国的レベルとか特定の立場からではなく文化・文明を知らないということは、今、考え直すべき大事な時代に差しかかっていると思います。

それで、今日のお話は、私のほうはだいたい十二世紀末ですから、八百年ほど前の話から始めまして、その宗教的な裏付けを福家先生からやっていただいたと思います。それから、中世の時代から近世にかけて——江戸時代ですが、旅行がもう当たり前の時代になってきます。命懸けの旅というところがちょっと大げさですけども、中世などはそういうことでなかなか個人では行けないわけですが、近世、江戸時代になりますと、交通の便が非常に発達してくるわけです。そういうところでどういうふうに受け継がれていくか、説経節の在り方も変わってまいります。説経節の内容が、先ほど『撰州合邦辻』の話が出ましたように、歌舞伎の世界に取り込まれていくような方たちです。多様な姿で発展していきます。北川先生からそれを説明していただいたと思います。

最後は、我々は「世界遺産だ」「世界遺産だ」と言って喜んでおりますけれども、今回の紀伊山地の霊場については、「大峰山を見たらこういう惨状になっているではないか。指定されて喜んでいる場合か」というのを前先生から一発かまされたわけです。

奈良県のお方で、三重県の熊野のほうにも、「前」さんがいれば「うしろ」さんがおられる

のです。それから、「東」さんがおられたら「西」さんがいるという、これは熊野地方の特徴です。奈良県、大和にもこの「前」さんがおられます。前さん、「うしろ」さんというのは大和におられます。

前 後田という方がおられますね。

酒井 ああ、そうですね。「うしろ」という字は「後田」、いま言われた前・後ろの「後」とお風呂の「田」が付いている。

前 そうですね。

酒井 それから、宇宙の「宇」と「城」、「うしろ」「うしろ」さんもあります。ですから、いろいろなかたちに言い換えていますけれども、熊野ほうへ行くと、前・うしろと東・西とがあるのです。熊野では「あずま(あづま)」とはあまり言いません？ 久保幸一先生、どうですか。

久保 あまりない。

酒井 あまりない。「あづまや」「さんはしかし」「あづま」さんですね。湯峯のね、よくわかりませんけれども。

ところが、霊場の、熊野のほうは「東」と書いてあれば「ひがし」さん、それから、必ず「西」さんがあるわけです。そして、「前」さんと「うしろ」さんがあります。ある意味では単純な呼び方もしれませんが、非常に方向性のはっきりとしたところがあります。そこでのその前さんから、熊野の、もう長年、三十年、山に登られている中で、現在どうなっているのかということをお話しいただいたのです。

では、もう一度繰り返し返すかたちになりますが、福家先生からもつひとこと、五分間、あるいは十分以内で、お話で漏れた点とか強調したい点をお願いしたいと思います。よろしくどうぞ。



福家 説経節を実際に伺っております。今日さまざまなお話が出た中で、よく出てくるのはやはり時衆のことだと思っております。熊野も含めて、この時衆の人たちの持っていた文化といえますか、宗教的な位置には非常に大きなものがあると思っています。

時間の関係で話を割愛しているところもございませぬけれども、先ほど最後のほうで蝉丸のことが出てきました。蝉丸というのは琵琶法師でございまして、逢坂の関にいたということで、そこに蝉丸神社ができて、音曲というのですが、音楽の神様ということで、そこに説経節の人たちが寄り集まってきた。そこに近松寺、三井寺ができて、中世にはこういう芸能の人たちを支配におさめる、こういう流れになると思っています。

先ほど説経節の流派を二つ言いましたけれども、三井寺流というのがあって、それが近世になると説経浄瑠璃に流れていった。そこで近松寺というお話をしましたが、お気付きのことだと思えますけれども、このお寺には近松門左衛門が若いときにいたのだという、こういう伝承が残っています。「近松」という名前もそのお寺から取ったのだということなのです。

この説明をするとなかなか時間がかかるのですけれども、近松がまだ無名時代の若いとき、説経浄瑠璃の作者になるうとは思わない時代、そのとき仕えていたのは京都の一条惠観という人ですけれども、この人の父親は、後陽成天皇で、母方は近衛家の出身の方ですが、この人の兄弟や親族には、三井寺の僧になった人が多い。その関係で、人脈的にも近松の周りにはそういう人たちがいて、三井寺と近づける縁があったのではないかと、私は思っています。もちろん、その時代の資料というのはございませんので、近松の若い時代の研究がなかなか極めにくいわけなのです。それでも近松寺の説教師支配と近松門左衛門が出てきた背景ということ言えば、やはり一番、三井寺の、近松寺の別所が近かったのではないかと考えられます。

それと、もう一つは時衆のことですけれども、先ほどの『小栗判官』の話でもそうですが、必ず関寺というお寺が出てきます。関寺というのも、やはり中世から三井寺の支配下に入りまして、今は長安寺という寺で残っています。ここは昔から有名な、大仏があつて物語の中にも出てきています。

この関寺大仏は地震で崩壊します。天延四年（九七四）といえますから、一〇〇〇年以上前、九〇〇年代の終わり頃に地震でつぶれました。これを再興するときに一生懸命働いた、頑張った牛がおりまして、これが釈迦仏の生まれ変わりだとの話が広がります。これは有名な話で、『今昔物語』にも出ていますけれども、その牛を供養した塔が鎌倉時代の石塔として、重要文化財になって残っています。

その関寺と時衆ですが、一遍上人の絵伝にあるような踊り念仏があり、そのあと、時衆の信者さんというのはたくさんいたと思いますけれども、室町になってから蓮如さんが出てこられます。時宗と浄土真宗では宗派が違いますけれども、やはり基盤になった人たちというのは同じ地に住んでおられる方ですから、時宗から蓮如さんに信仰が移っていくような感があります。特に近江の歴史を見ておきますと、時宗と浄土真宗、特に蓮如さんの影響というのは非常に甚大ですので、そういうことを報告の追加とさせていただきます。

北川 私の話は、端的に言つと、熊野も四天王寺も再生のための聖地であつたということです。熊野で言いますと、湯峯の温泉につかることによって小栗が元によみがえる。四天王寺で言いますと、つし王が西門の鳥居を抱くことによって元の姿によみがえる。そういう、「再生」が聖地としてのキーワードであつたということをお話ししたつもりです。

酒井先生もおっしゃいましたように、とりわけ中世という時代は、いろいろな苦しみを人々は背負っていたわけです。ある者は、小栗に代表されるように不治の病、こういう苦しみから解き放たれて別の新たな命に生まれ変わる。あるいは貧困、あるいは脱しきれない身分からの解放。さまざまな意味での「再生」が、中世の庶民信仰、中世の聖地・霊場を理解するためのキーワードだということです。

熊野の信仰を考えるために、先に四天王寺について考察し、その四天王寺を熊野と対比させたわけです。繰り返しになりますが、この「再生」は中世の聖地全般を考える上でのキーワードでもあります。例えば、四天王寺や熊野と同じように全国から多くの参詣者を集めた霊場に信濃の善光寺があります。皆さんも、行かれた方はよくご存じだと思いますけれども、あそこには本堂の下に戒壇巡りというものがあります。

あれは、善光寺に行くと皆さんが必ずされるものですがけれども、あの戒壇巡りの暗闇は、実は地獄を表現しています。この世からあの世にいったん墮ちるわけです。そして、その地獄の中で、すなわち戒壇巡りの途中に鍵が付いていて、それに触れることで皆さんは再びこの世にみえつて来ます。あの鍵は善光寺如来の指先に糸でつながっているというのです。まさに「地獄に仏」で、仏さんに巡り合い、仏さんと縁を結ぶことによって、新たな生命としてもう一度よみがえってくるというわけです。こういうことを難しい言葉で「擬死再生」と表現しますけれども、あの戒壇巡りは再生のための装置なわけです。善光寺縁起のお話でも、本多善光の息子である善佐のよみがえりや、皇極天皇のよみがえりが語られるのですが、善光寺もやはり、熊野や四天王寺と同じように、再生の聖地であったということがわかります。中世のいわゆる庶民信仰の聖地、あるいは修験道という宗教も、この「再生」というキーワードで読み解くことができます。

もう一つ、世界遺産登録に関して少し付け加えておきますと、紀伊半島には日本人が千年以上にわたって信仰してきた聖地が集中して存在しています。高野山、吉野、大峰、熊野、そして伊勢神宮もそうです。こういった日本の聖地があつた紀伊半島に集中し、それらが参詣道やさまざまな道でつながって巨大な聖地を構成している。ですから、「日本の聖地」というかたちで世界遺産登録ができないだろうか、そういう話を田中さんをはじめ、知人たちはしていたのです。

ただ、関係者から聞いた話によりまして、実は日本の政府は消極的だったということなんです。政教分離の原則から、「聖地」とか「霊場」という用語で宗教性が出ることを嫌がっていたと聞いています。ところが、ユネスコが力強く後押ししてくれましたというのです。先ほど酒井先生がおっしゃいましたけれども、宗教と戦争というのは分かち難い関係にあります。ほとんどの宗教が「平和」を口にするのですが、その宗教のために戦争が起こるといふのは、全世界が経験してきて、よく知っていることです。ちょうどその世界遺産登録の前後、そして今も、実際にまだ中東付近を中心に、宗教による対立、そして戦争が繰り返されています。

ところが、日本という国はどうでしょうか。もちろん宗教による対立、戦争がなかったわけではありませんが、仏教という外来宗教を受け入れて、それまでからあった神祇信仰、神道とも共存させてきたではないか。そしてそれだけでなく、さらにそこから、修験道やら陰陽道をも生み出し、それらとも矛盾なく共存している。これは素晴らしいことではないか。日本にはそういう文化があるではないか。そういったメッセージを、世界遺産登録を通じて世界に投げかければよいではないか。こういうユネスコの強い後押しがありまして、残念ながら伊勢神宮は同意していただけなかったのですけれども、「紀伊半島の霊場と参詣道」の世界遺産登録が実現したわけです。

私はこの世界遺産登録に関して、これまでもさまざまところに書き、そして語りました。「これは単に物理的に紀伊山地の霊山・霊場や参詣道が場として登録されたのではない。日本人の精神文化が世界遺産に登録されたのだ。そう評価すべきだ」と。今回のシンポジウム開催に關しまして、冒頭に酒井先生のおっしゃったお話とつなぐ意味で、少し付け加えさせていただきました。

前 私の話の中心は大峰山脈で立ち枯れが非常に深刻になっているという話だったのですけれども、実はこの大峰山脈の針葉樹とかブナが立ち枯れているという問題だけではなくて、「枯れる」という問題について言いますと、日本の全体を見ますと松枯れの問題があるのです。松というものが日本人の文化に与えている影響というのは非常に大きいと思います。これは絵画だけでなくて芸能の世界でもいろいろな意味で言えると思うのですが、この象徴的な松が全国的に枯れています。今、東北まで進んでいます。

私が住んでいる奈良でも、奈良公園でも、もうかなりの松が枯れました。これは私が環境保護に取り組んできた一九七〇年代ぐらいからこの松枯れがひどいということ、その原因は、マツクイムシが木の中に入って、このマツノザイセンチュウというのが幹の水分・養分を上げるところを食っている。それでマツが枯れるのだという話があって、そのマツクイムシをやっつけるということで、薬剤を散布することが行われま

したが、一向におさまらなかつたということです。原因は何かということで、一つ有力な考え方としては、酸性雨が影響しているのではないかとということです。

それから、最近、新聞でもこのあいだ出ましたけれども、日本海側でナラ枯れが始まっています。

コナラです。これは、里山、雑木林によく見られる薪炭林です。昔、炭焼きに使った木の典型にクヌギとナラがありますけれども、このナラはやはりナラ枯れ菌というものによって侵されているということで、京都なんかでも次々と枯れているということです。私が住んでいる奈良地方までは来ていませんが、時間の問題だと言われています。そういうナラ枯れが広がっているということです。こうい



うかたちで、いろんなところに広がっているという現状があります。

それから、もう一つ、大峰山脈に限定しましたけれども、皆さんよくご存じの大台ヶ原は、大きく西大台と東大台に分けられますが、この東大台では針葉樹のトウヒ林が広がっていて、大台ヶ原の象徴的な、苔むしたところにトウヒ林が広がるというのが東大台の典型的な風景なのですが、これが正木ヶ原とか、ある区域に集中的に立ち枯れています。

近鉄の電車の駅のホームのポスターなんか立ち枯れの写真がドーンと載っておりますけれども、どういう意味でああいうものを載せているのか、僕は非常に疑問に感じるので。人間で言ったら病死の状態を堂々と写真に載せて「これが大台ヶ原ですよ」ということを示しているという、写真家もわかっていないですけども、載せたほうというか、会社も含めて、何もわかっていないというふうに感じています。

実は、東大台の立ち枯れについては、環境省はそれなりに取り組みをやってきて、トウヒの再生事業なるものをやってきましたけれども、これは完全に失敗しています。育っていません。あらためて環境省が一〇〇年事業ということでトウヒ林を復活させるという取り組みをやるうとしているのですが、これも見通しがついていません。鹿が食っているといいますが、それがどういふ影響を与えているかということもまだ十分解明されているとは言えません。鹿が増えているかどうかということもはっきりしないという状況なのです。

ただ、環境省は大台ヶ原にもすくく力を入れているのです。なぜかと言いますと、大台ヶ原の西大台の部分は、今度、利用調整区域（利用調整地区）ということで立ち入りが制限されました。九月一日から限られた人しか入れなくなりました。これは大台ヶ原の西大台の自然を保全しながら、立ち入りをかなり制限して利用していくという、そういう区域として設定されたということです。

この検討会の委員にも私は加わりましたが、西大台は、製紙会社がどんどん伐採しようとしたことに対して、市民が伐採反対の署名運動を展開して、その結果、国が買い上げた区域です。大台ヶ原は、環境省が直接管理する全国で唯一の国立公園です。ですから、大台ヶ原については、環境省は好き勝手なことをいっばいやってきたということになります。そういう中で、「保護するんだ」ということで取り組まれていますけれども、それがどこまでうまくいくかというのが注目されるのです。ですから、環境省は大台ヶ原にはものすくく力を注ぐけれども、大峰山脈については、このオオヤマレンゲとシラビソの純林と、天然記念物が二つありますが、どうも十分な対策を取っていないということもちょっと併せて指摘しておきたいと思います。

酒井 ありがとうございます。それでは、一通り先生方からいろいろ出していたいたわけですが、順番にまたちょっとお尋ねしたいこととか、今日は福家先生は三井寺園城寺の関係の天台宗の教学の責任者としておいでいただいたのですが、比叡山延暦寺との関係はおわかりになっ

ていますか。私は若いときに比叡山延暦寺に行つて、根本中堂に座つたら、何と言つのですか、若いお寺さんは。

福家 ああ、説明しているガイドさんですか。

酒井 ああ、はい。その方が「山と寺とはわかるか」と言われるのです。「寺門山門の違いがわかるか」と言つて、観光客に。私は下から答えを言いましたが、山は富士山でない。「わしが言つことを先に言つな」というお顔でした。これも含めて、比叡山は非常によくご存じで、その延長上で三井寺をイコールとお考えになつてゐる向きもあるかと思ひますので、ちょっとその点をお願いします。

それからもう一つは、芸能を、三井寺との関係でお願いします。三井寺というと、皆さん、弁慶を思い出されませんか。ありますね、弁慶の引きずつた鐘ですね。なかなか面白い話があるのですけれども、三井寺と、先ほどお話しのような関寺とか近松のゆかりのお寺、こういう芸能との関係をもうちよつと説明していただいたらと思つたのです。

私は、近松門左衛門の名浄瑠璃、皆さんご存じの『曾根崎心中』だとか『冥土の飛脚』とかいろいろあります。ああいうものがどこから出てくるのかということが関心があるのです。おそらく、説経節とかいろいろな宗教にまつわる話の中で、それを、もう一步を、時代の中で、それこそ、元禄、享保、特に享保という時代がちょっと暗くなって、盛んに心が出てくるような時代に人々をどう救うか。

近松の浄瑠璃の最後に「阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみやくさんぼだい）」というのが出てきます。お経の一節がパツと出てきて終わるのです。ですから、我々がキリスト教、西洋世界を理解するためには、聖書を読んでいないとわからないと言つわけです。ですから、日本の、例えば浄瑠璃一つにしても、文字面だけを理解するのではなくて、その背後に宗教があり、北川先生が言われたように「説経節では必ず助けられるのです」と、この世で救われない人を救つて話は終わるのです。絶望的なところへ追い込まないのです。そういう中で、一貫して、やはり仏教というものがあるというふうに私は思つたのです。

例えば、最近、五木寛之さんという作家が仏教を追つておられます。有名作家になつてからも龍谷大学で仏教を学ばれました。世界に仏教が広がっているのを、五木さんは追跡されてゐるでしょう。

私の同年輩の友人がこのあいだ東京の電車の中で立つていたら、前に座つていた二人のブラジル人が立ち上がったというのです。この君はブラジルに六年間商社マンとして滞在していたのでポルトガル語で「私はそんな年寄りに見えるか」とこつと言つたのです。「そのとおりだ」と向こうが答えたのです。その最後に、「あなた方が私に席を譲つたのはいかなる理由であるか」と聞きましたら、「教育です」と答えたのです。エデュケーションと答えたのです。つまり、そういうことを教育で教えるか、時代が古くなれば、それは日常生活の中で最も影響の大きい宗教で

教えているのではないですか。ですから、それを全部欠いたモノだけの人間社会を、特に戦後の社会がつくってきたのではないかと私は思っています。

私ばかりしゃべってはいけませんので、先生、よろしく願います。(笑)

福家 いえいえ、私は、別に宣伝しにきたわけではないのですけれども、山門と寺門ということで、天台が大きく二派に分かれるのは、十世紀の終わり頃です。比叡山から我々が分かれます。ご存じのとおり、天台宗というのは伝教大師最澄が開きになりました。伝教大師を初代としますと、伝教大師さんと中国と一緒にいつて行かれた義真さんという方がおられます。この方が二番目のお山のあるじになられます。「座主」というふうにお呼びします。

三代目に慈覚大師円仁さんという方が出られます。伝教大師さんのお弟子であり、この方がいわゆる山門派の流れの中心になる人です。我々、三井寺のほうは、初代の座主になられた義真さんの弟子になられた智証大師円珍という方。この方が我々寺門の流れになります。

慈覚大師は三代目の座主をします。智証大師は、五代目の座主をされます。三代目と五代目、それぞれ比叡山の座主をされるのですけれども、このお弟子さんたちが、簡単に言いますと、二つの大きな法流ができます。比叡山の上で二つの大きな流れができますから、時代を経るごとにだんだん不和が出てきて、十世紀の終わりぐらいに智証大師の法流の人々は比叡山の山を下って、三井寺に入ります。これで、事実上、天台が二つに分かれました。

平安時代の文学でもそうですが、山法師といえは比叡山のお坊さんを表し、寺法師といえは三井寺の法師を表すという、こういう「山」「寺」という言い分けが出てきます。有名な『尊卑分脈』という諸家の系図を書いた本がありますが、たとえば、各撰関家の子どもたちが坊さんになられてどの寺に行かれたか、一目でわかるように名前の肩に「山」と書いておけば比叡山に行かれたのだな、「寺」と書いてあれば「あ、三井寺に入られたのだな」と分かるようになっていきます。「山」と「寺」というのは、そういう略号にもなっています。



これが中世半ばとなって、これは伝説ですけども、武蔵坊弁慶が攻めてきて三井寺の鐘を分捕っていったと。今その鐘は残っていて、「弁慶の引き摺り鐘」と呼んでいます。奈良時代の鐘です。確かに、その引き摺ったきず、すり減った跡が残っておりまして、本当に弁慶が引きずったかどうかはわかりませんが、それに近いことがあったのだらうという、いろいろな話が残っています。そ

ういうことで、比叡山と三井寺の人は非常に仲が悪かったのです。

もちろん、今は違います。江戸以後は今も仲良くしているのですけれども、中世はとにかく「山寺両門の争い」といって、これは犬猿の仲でした。京都、中世ですと都ですが、京都の周辺に常備軍があったのは、ほとんど比叡山と三井寺だけなのです。先ほども言いましたように、三井寺のすぐ近くは東海道が通っています。これはもう、古代からずっとです。だいたい昔から、東のほうから攻めてくると、石山寺近く瀬田の唐橋が重要な軍事拠点になって、次は逢坂の関所、そのあとはもう一気に京都に入ってしまう。その間に三井寺がある。やはり非常に戦略的にも重要なところですから、必ず世の中がもめると戦乱に巻き込まれます。

例えば、源平合戦ですと、三井寺は源氏、比叡山は平氏のほうに付くわけです。『平家物語』に宇治川の合戦という一節がありますが、謀反がばれてしまい以仁王と源三位頼政が、三井寺に逃げてきます。三井寺から、興福寺と延暦寺に「助けてくれ」と言ったけれどもなかなか返事が来ないので、以仁王は、興福寺に向う、その途中、平等院で追い付かれて、宇治橋で合戦になる。

南北朝時代になりますと、三井寺は北朝、延暦寺は南朝に付きます。それで、いつとき、足利尊氏は九州のほうに逃げますけれども、向こうは逃げられますが、お寺は動けませんので、比叡山の衆徒と新田義貞の焼き討ちを受けます。これは『太平記』。建武三年の正月のことです。

そういうことで、山門と寺門といっても、単にお寺どつしの争いというのではなく、政治抗争に必ず巻き込まれて、どちらかに付かないといけない。こちらが一方につくと必ず向こうが逆に付くということがありましたので、それが一つの問題として、一番見やすいところでは、他にも細かいところはたくさんありますし、必ずしも全員が仲が悪かったわけではないですけれども、そういう状況があったということです。

あと、芸能のことですけれども、三井寺の別所は、三井寺の本寺、惣寺がある場所の南側。東海道と小関越えの道にはさまれています。京都側は逢坂の関、こちら側は大津の宿場町です。宿場から一歩出れば、政治権力の及ばない地域なのです。これは昔、網野善彦先生が言われた、まさに境界領域というのですか、アジールというのですか、まさにそういう特殊な地域なのです。

そういう地域ですので、なかなか文献資料は残っていないというのが難しいところなのですけれども、三井寺に残っている資料には、平安ぐらいまでは三昧地というのですか、埋葬の地域でもありました。そういうところに関蟬丸神社ができ、関所の外、坂の下であるとか、そういう、地理的な条件がそろった。

そして、近くに三井寺がある。その三井寺の影響下で別所寺院というのができていて、そこに念仏聖とか修験の山伏とかが集まってくる。その中に、関蟬丸神社があり、そこにまた、いわゆる農民と違う人たちが、芸能の人たちが寄りやすい環境ができてくる。それがもうかなり古く

からあつたのだと思います。

資料に出てくるのは、説経節ですと近世に入ってしまっていますけれども、こういう状況が、もっと古くからかなり濃厚にあつたのではないか、ということですよ。資料に『関蟬丸神社文書』というのが残っておりまして、これは室木弥太郎先生のご尽力によって出版もされておりますけれども、やはり江戸時代以降の近世の文書です。なかなか中世の様相はわからないということです。

酒井 次に北川先生、いかがですか。今日は大変上手にお話しされて、四天王寺と熊野という二つの柱を結び付けながら、九十九王子をつないで熊野三山へ話をもって行かれた。

こういう中で、今日、特にまとめられたのは、一つは、この世において救われない人がいますね。それを、病気が治るからと、貧困が治るかどうか。例えば、今回出ましたように、ハンセン病になれば社会的に疎外されますから、どうしても貧困の問題をかかえます。こういう人々がこの世において救われるためには何が要るのか。それを、今、福家先生からお話しいただいたのですけれども、説経節というのは、一説ではそれが、大阪市大の阪口弘之先生、浄瑠璃の研究者ですけれども、鎌倉時代の叡尊、忍性が多くの人たちに菩薩戒を授けながら方々で仏法を説いています。そういう救いの問題が出てきます。

私は叡尊が偉いと言つのは、蒙古の大襲来の中で申しましたけれども、やはり鎌倉時代は、時代が変わるとともに、その時代の課題に応える宗教家が出てきているのだと思います。これは、「鎌倉旧仏教」という言葉、ちょっと私は言いたくはないのですけれども、いかがですか。岩波の『日本思想大系』に「旧仏教」と書いてありますので、天台とか真言の方に失礼だなどは思うのですけれども、こういう鎌倉新仏教以前の仏教をも含めて、あるいは律宗ですとかが、社会的問題に必ず取り組むのです。キリスト教だって同じだと思えます。ですから、宗教が最もそういう面において果たす役割が大きい。人間は注射だけで生きていくのではなくて、やはり注射が効くかどうかは受けるほうの活力の問題です。すね。

そういう中で、この世において救われる。それを、文字を読めない人々。私は自分も含めて文字を書く人はあまり信用しないです。文字を書く人は、文字のトリックがいっぱい入っているのです。小説がその最たるものです。だけれども、文字を書けない人、日本の言葉で「無筆」と言つのです。「文言」というと批判を受けますけれども、無筆の人、筆を書けない人が、例えば仏教をどう理解するかです。これはやはりお寺の説経です。

お寺さんが説経をするだけではちょっと難しいかもわかりません。今日は福家先生にわかりやすくお教えいただいているのですが、それを庶



民の音楽入りで物語りに仕立てたのが、説経節ではないですか。説経節は江戸時代の、それこそ大坂城が落城した後、人々が平和になった頃に広がり始めます。そして、その種はもつと真つ暗な前の時代、中世の時代のものを踏まえながら、平和な時代にそれを広めていくというのが私の仮説なのです。ただ、はやつた、はやつたではなくて、です。その中で、文字を書けない人が話を聞いて元気づく。仏教界に芸能を伝え持つていく一つの流れも出てくると思います。

あまりまた喋りすぎるといけないので、その点、専ら大阪市内も含めて参詣道を追いかけていく北川さん、ちよつと補足していただけますか。

北川 ちよつと非常に難しい問題で、何をお話しさせていただいたらいいかわかりませんが、中世には聖地と呼ばれた霊山・霊場に、行き場のない人、貧困にあえぐ人、不治の病に冒された人などが多数集まってきました。『小栗判官』『さんせう太夫』でもそうしたことがよくわかりますし、『しんとく丸』ではそういった人々が寺社の境内に捨てられることがあったことも知られます。先の『一遍上人絵伝』には四天王寺周辺にそうした人々がたむろしていた様子が描かれています。中世の聖地は、そういう行き場のなくなった人々が最終的にたどり着く場所でもあったわけです。それと、先ほどの福家先生の話と少し絡めて言いますと、仏教自体は人々の平等を説くのですけれども、お寺にも格付けがあり、お寺の中にも階層差があります。高僧と言われる人たちから、庶民の中に分け入って布教をして歩く人まで、僧侶自身にたいへんな身分差があるのです。その中で、庶民の中に分け入り、活動する僧侶が、お寺の中では最下層に位置付けられます。そういう構造になっているのです。福家先生が先ほどから度々おっしゃっている時衆が、まさにそういう役割を担う集団であったわけです。

今では一つのお寺は一つの宗派というケースが大半になっていますが、かつては決してそうではありませんでした。今も、例えば信濃の善光寺は浄土宗の大本願と天台宗の大勧進という二つの教団で維持されています。当麻寺も真言宗と浄土宗の二つで維持されているのですが、かつてはそういうように、複数の教団で一つのお寺を構成するというケースが多数あったわけです。信濃の善光寺にも時宗がありましたし、熊野にもやはり時宗の集団（時衆）がたくさんいたのです。そういう時衆が、お寺の中で下層に位置付けられる。そして、彼らが遊行という、各地を遍歴して、教えを、信仰を説いて回るという役割を担ったわけです。

先ほどお寺の中の階層差と言いましたけれども、上のほうのお坊さん、教義や教典の解釈などを行っている学侶という偉いお坊さんたちと、庶民の中に分け入って布教する人たちというのは、必ずしも同じことを言いません。純粹に教義だけを語っても、一般の人には全然伝わらない

し、難しくとても理解されない。一般の人たちに布教するときには、一般庶民にとってわかりやすく語らなければならぬし、あるいは受け入れやすくするために芸能なんかを伴うケースも多々あるわけです。芸能民が巨大な権門寺社の周辺に住んでいたということも、一つそういう理由があります。

本日の会場の入り口にもチラシを置かせていただいたのですけれども、明日、大阪市内の玉造稲荷神社の境内で、国指定重要無形民俗文化財の伊勢大神楽を上演していただきます。私はこの伊勢大神楽も一貫して研究を続けているのですが、彼らは今でも一年中、村々にお札を配り歩いて伊勢の信仰を普及してまわっています。遊行の宗教者としては、おそらく現在日本で唯一、一年中歩いている人たちだと思いますが、彼らはまさに「大神楽」という神事芸能を携えて伊勢の信仰を広め歩いているわけです。

先ほど福家先生は、教義・教団の歴史だけで仏教史が構築されてきた。でも、それだけでは本当の仏教史ではないとおっしゃいました。

ある意味、教義に反する部分なども含めて庶民信仰というものを視野に入れないと、本当の仏教史、仏教史の全体像を語ることはできないと思います。そういう構造はもちろん天台宗や三井寺だけでなく、日本の宗教なり信仰なりは、ほとんど全てが同様の構造を抱えているのです。うちの家はずっと河内で、ずっと西本願寺の門徒なのですけれども、本願寺の場合でも、宗祖親鸞は非常に哲学的な教義を語るわけです。ところが、その信者であるはずの門徒の方たちは、現実にはまったく違うことをやっているのです。

親鸞は「阿弥陀如来しか認めない。神様の存在も認めない」と言うわけです。ところが、河内の村はほとんどが浄土真宗の檀家ですけれども、それらの村々には皆ちゃんと神社があります。決して神社はなくなっていないのです。そして、お寺へ行ったり、法事などの際には本願寺の末寺のお坊さんに親鸞の教えや浄土真宗の教義などをいろいろと聞くわけですけれども、それはそれとして納得しつつも、また神社にお参りに行くわけです。西国三十三ヶ所のお参りにも行きますし、お不動さんの日になったらお不動さんへ行き、庚申さんの日には庚申さんに参る。女性の方ですと淡嶋さん（和歌山市加太の淡嶋神社）へ行ったり、出産の時は中山寺、受験になると天神さんというように、好き勝手に信仰生活を送っているのです。節操がないという見方もできますが、これらを矛盾なく、矛盾するとも思わずにやっているのが我々日本人なのです。

教団の側の構造も複雑ですが、それを受容する我々側の精神世界、心の中も、相当に複合構造になっている。これが日本人の信仰であり、別に恥じることでなく、それが日本の文化で、ある意味世界に誇るべき文化でもあるのです。酒井先生から課された命題とは離れてしまったかもしれませんが、福家先生のお話とも少し絡めてお話をさせていただきました。

酒井 ありがとうございます。日本人の宗教性というのをいっぺん考えなければいけないのですけれども、私は、若いときは、やはり一神教



十二日)、ノーベル平和賞が発表されました。受賞者は、何という人ですか。

中野 ゴアです。

酒井 はい。中野先生に回答をしていただきました。(笑)

今回、アル・ゴアさんと「気候変動に関する政府間パネル（IPCC）にノーベル平和賞が与えられました。ゴアさんは地球の温暖化に対して対策の手を打たれた方でしょう。アメリカの元副大統領で、アメリカというのは一番世界に害を及ぼしているのではないかと思っています。一番大きいのは戦争、それに「京都議定書」の約束を守らないことです。その点で、私はアメリカはちゃんとしてほしいと思っていますけれども、その元副大統領で、かつてブッシュと大統領選を戦ったゴアさんが人類の緊急事態に対して大胆な行動に訴え、行動したというのは、感激の極みです。(笑)

私は、ノーベル平和賞を与えるノルウェーのオスロのあの部屋（ノーベル・インスティテュート）で国際会議をしたことがあるのです。そのときに、後ろに佐藤栄作さんの写真が飾ってあったのです。それで、横にいた人に、イタリア人のローマから来ている女性の先生に「これはうちのプライム・ミニスターだ」と言って、「ちょっと私は疑問を持っている。おたくはノーベル平和賞をもらったのか」と言いますと、一九二〇年代にもらっているとのことでした。

佐藤さんがもらったのは非核三原則が認められたからでしょう。私がこの会議から帰ってからほどなく、スウェーデンは「佐藤さんに出した

というのはかなり厳密な宗派だと思い、あれも信じ、これも信じてはおかしいなと思っていました。ですから、一神教世界が非常に魅力があるのですけれども、考えてみますと、日本での宗教というのは、ヨーロッパから出てきた宗教と同じようなものではなくて、はっきり違っていると思います。

世界がいま三つの大きな宗教に分かれていて、それぞれが存在価値を持っているのです。ですから、キリスト教が正しくて他はだめだとか、仏教は正しくて他はだめというようなことはもう考えないほうがいいです。特に日本人は、まぜこぜで生きていく宗教性を持っているというふうに私は思います。

最近、仏さんの世界に近づいてきたのかもしれないけれども…。若いときには単純、純粋なものに縛られていたようです。少し変わってきました。世界遺産に関係して変わったのかもわかりません。

それでは、最後になりましたけれども、前先生に自然環境問題を取り上げてもらったのですが、実は昨日（十月

のは間違いだつたかもわからない」という議論をしたといひます。私も間違いだと思ひます。「沖縄密約」があつたからです、平和への疑問です。福家俊明さんから、伝教大師、智証大師の言葉引いて核兵器や平和について教えられました。キリスト教の「旧約聖書」も「剣を打ち直して鎌とし、槍を打ち直して鎌とする」と説いています。

平和賞で横道に入りましたけれども、前先生の言われたところをもう少しお願いします。山の立ち木が枯れてきているのはどこの責任ですか。ちよつと、単純な発想ですけれども。

前 難しい質問ですね。当然のことですけれども、その原因が明確にできれば対策も明確になってくると思つたのです。ところが、「その原因について確定していない」というふうに申し上げましたが、いろいろ原因は考えられると思つたのです。今まで言われているところで言いますと、ヨーロッパの、例えば「黒い森」と言われたドイツの森ですが、あれがもう見事に枯れました。その原因は酸性雨だというのは、ほぼ一致する見解なのです。特に、まだ東ヨーロッパとかの社会主義圏があつたときには、あまり環境対策を考えていなかったですから、そこからすごい酸性物質が降り注いでくるということに枯れたということは、もうほぼはつきりしています。

そのヨーロッパの酸性雨のペーパー、酸性の度合いですが、これはだいたいpH四ぐらいですけれども、それと同じpH四ぐらいの酸性雨が日本全国に降っているということなんです。その中で、約三割は中国からの原因ではないかというようなことがかなり言われているようです。あとの分は国内の、私は車に乗りませんので先ほどちよつと自動車公害を強調したのですけれども、自動車だけではなく、工場のばい煙とかそういうものが複合して影響を与えている可能性は高い。特に、酸性雨ではなくて酸性霧がひどいです。といひますのは、霧になるほど粒子が細かいですから、表面積が広がってきます。ですから、酸性雨よりも酸性霧のほうがはるかにきつい。それが山脈にぶち当たったときに深刻な影響が与える可能性があります。ですから、山登りはへたにしないほうがいい、危ないということになると思つたのです。

では、それで全部説明できるかといひますと、先ほど言ひましたように、縮枯れ現象といひるのは確かに世代交代説で説明できる現象もありますし、それから、鹿の剥皮をどう考えるかとか、先ほど言ひました地球温暖化の影響ですね。ブナは冷温帯ですから、比較的寒いところで育っていくというところで言ひますと、地球が温暖化すれば、例えば太平洋側のブナは衰退していく可能性はあるということなんです。ですから、そういうことも考えなくてはいけないということなんです。

地球温暖化で言ひますと、いわゆる二酸化炭素が一番大きな原因だと言ひられています。こういう気候変動という問題で言ひれば、中世に、一向一揆がものすごく広がりました。あの一向一揆が広がっていく背景といひるのは、やはり人々の不安感が広がっていく中で救いを求めていくとい

うこともあると思うのです。その不安とか置かれた状況の中に、気候変動で不作になるとか、天変地異というのですか、そういうことが中世の室町期にかなり深刻な状況があったというふうに考えられるのです。

そういう中で、救いを求めて、蓮如のような救世主、いわばスーパーマンが現れて、一向宗、浄土真宗の本願寺派の門徒が急激に広がっていきというようなことを考えてみる必要があります。立ち枯れとかいう問題としては、原因は確定はしていませんけれども、どうも主な原因としては今言ったようなことが考えられるのではないかといいことです。

酒井 例えば、今から五百〜六百年前と今日とでどちらが生きにくいかわかりますが、人間は自分の生きるための環境を変えてきて今日に至ったわけです。その中で、大きな自然を変えてきて、自然は、私が先ほど申しましたように、あるところまでは行けるけれども、それ以上入ってはない臨界というのがあります。それを我々は容赦なく破壊してきているのです。これはやはり、ゴアさんではないですけれども、人類的課題です。

このことを我々が考えないと、便利さだけで、何でも便利で役に立つ、助かるというだけでは、やはり人類、地球がどうなるかという時点で今さしかかっていると思います。それを戦争で今はごまかしているのだと私は思うのですが、環境問題では、大峰山に「靡八丁」という言葉がありますね。**靡八丁** なびやちやうぢやう斧不入。つまり、大峰山の修験にとって、その道のところから八丁のあいだは斧を入れない。ちゃんと保存するという原則で修験道は生きてきたのではないかと、聖護院の宮城泰年さんの文章から私は教えられたのです。

世界遺産には「バッファゾーン」と呼んでいる言葉があるので、それに当てはめてもいいかと思うのですけれども、バッファゾーンになったところで、バッファゾーンというのは、緩衝地帯です。だけれども、その外も、それも含めて木が荒れていくようでは、これは大変なことではないですか。

それで、例えばもう一つ、ちょっと山林関係で腹が立つのは、私が北海道に調査に行ったときに、案内してくれた人が「あれを見て下さい。山の木が切り倒されているでしょう」と言われたんです。国有林ですよ。それで、なぜ切り倒したのかといいますと、林野庁関係者が参議院に立候補した時からの結果だということです。もしそうなら、この国有林を切り倒すことと支持者とが関係しているらしい。その人がその政治家を支えるのです。こういう国家ですよ。

ですから、酸性雨は中国から来ているかもわかりませんが、日本の国内からも山林を切り、山を削りますので、我々は慎重に、我々を取り巻く環境をきちっと社会的に位置付けて生きていかなければなりません。そのときに、一つの地域を守るだけではだめです。自分の哲学を

持たなければいけません。その哲学が何か私はわかりませんが、ゴアさんの行動に学ぶ点は大いにあります。

例えば、瀬戸内寂聴さんは天台系ですか。あの方が、自分が俗世間を離れるときに、迷われたでしょう。おじさんにキリスト教の熱心な信者がいる。しかし、片一方に仏教。どちらを取るのか。どちらを取るかは偶然なのです。キリスト教によって救われることもあり、自分が仏教を選んで助かることもある。ですから、いろいろな偶然が作用しながらその人の選ぶ人生が決まってくるのです。寂聴さんの生き方はそうです。そして、寂聴さんがお説経をされると、特に女性を中心に、大勢の人が来て、心を美しくして帰られるのです。ですから、そういう生き方をこのシンポジウムでも学んでいただいたいのではないかと思うのですが、力及びません。お説教をいたしまして恐縮でございます。では、これで終わりますが、ご質問がありましたらお願いします。はい。

質問者B 北川先生にお願いします。明日の大神楽は、あれは阿倉川ですか、それとも桑名ですか。

北川 伊勢大神楽には、おっしゃるようには桑名市になっている太夫村の系統と、四日市市の東阿倉川村の系統の二つがあるわけですが、明日ご出演いただくのは、太夫村系統の加藤菊太夫組です。

質問者B それからも一つ、先ほどの親鸞の言うようであれば、仏さんは入ってこれないということをおっしゃっています。しかし、現実には、浄土真宗の人らというのは、けっこう聖徳太子信仰があるんですね。ああいうのはどういふところから入ったのでしょうか。

北川 親鸞は、大日如来や薬師如来、観音菩薩とか普賢菩薩とか、さまざまな仏尊の中で阿弥陀如来しかその存在を認めない、また日本古来の神様についても存在を否定したわけです。そこでご質問の聖徳太子になるわけですが、聖徳太子は仏さんではありません。親鸞は京都の六角堂で、聖徳太子の夢のお告げを受けたことがきっかけとなって、浄土真宗を開くわけです。ですから、聖徳太子は親鸞にとっては師ということになり、浄土真宗では聖徳太子を大切にし、崇拜します。浄土真宗の多くのお寺に聖徳太子の絵伝も多数残されています。また聖徳太子は、宗派の枠を超えて日本仏教全体の祖であるという位置づけにもなります。

先ほど「教義と、一般の人にわかりやすく説く内容とは必ずしも一致しません。ずいぶん違ってくるのですよ」ということを言ったのですが、浄土真宗の場合も同様で、本願寺も八世蓮如が出現するまではほんとうに小さな教団に過ぎませんでした。それを、蓮如が実際に各地を行脚して、布教して回り、結果、本願寺を日本一の巨大教団にまで上げました。

蓮如は『御文』とか、『御文章』とか呼ばれる手紙の中で門徒相手にわかりやすく語っているのですが、そうしたところでは親鸞以来の考えを結果的に否定している部分もあります。

先ほど申し上げた神様のことがまさにそうなのですが、門徒からは、浄土真宗の「神祇不拝」という教えを聞いて、では従来からやってきた村の神社はどうしたらいいのかという質問が寄せられます。教団の立場からすると、親鸞の教えにのっとり、本来は神社の祭祀をしてはいけないのです。しかし蓮如は、「ずっとやってきたことだから、そのとおりやったらいい」と、そういう回答をしています。要するに、蓮如はそれだけの柔軟性といえますか、懐の深さがあつたから、一般の庶民、農民たちが浄土真宗、本願寺になびいていったということだと思います。親鸞の教えそのままでは教団が大きくならなかつたということですよ。

質問者B ありがとうございます。その蓮如が眞正の法難（一四六五年）で京都を追い出されますよね。そして、堅田にしばらくおられますね。あれは、あの地域が寺門のテリトリーだったからですか。

福家 眞正の法難のあとすぐ寄るのは、いま言っている近松寺なのです。三井寺なのです。三井寺の万徳院というお寺の人が助けたという伝承があります。近松寺の領地を一部割き、そこにしばらく親鸞聖人のお像とかを安置しました。それが後の近松御坊というふうになっておりまして、今でも近松別院というかたちで残っています。ですから、室町末に六角氏に焼かれますけれども、最終的には寺内町を形成して江戸時代を迎えます。そういう意味では非常に近松寺と蓮如さんは近いです。中でも、これも「堅田源兵衛の首」という有名な話が、蓮如さんの一代記の中に出てきます。実際にその首が残っているお寺も残っていますし、そういうことで、堅田よりも先に、近松御坊というのですか、三井寺の別所があつたということです。

質問者B そちらに逃げ込んだのですか。

福家 そうです、はい。

質問者B ありがとうございます。

酒井 時間が予定よりだいぶ過ぎました。もう一人だけ、よろしければご質問ございますか。はい、どうぞ。

質問者C 福家先生にお尋ねしたいのですけれども、先ほど青面金剛像のお話が出たのですけれども、私は今年の夏に、能勢や池田市に出掛け、何面か拓本を採って歩いたのですけれども、能勢で、等身大までも行かないのですけれども、仏さんと、蓮弁の下に「サル・サル・サル」と漢字の「申」の文字がありまして、それで、持ち物ははつきりわからないのですけれども、先ほどの芭蕉さんの句のように、何仏かなというのをみつけました。先ほど大津絵のほうに流れが行ったとかとおっしゃって……。

福家 「三猿」というのですか、いわゆる「見ざる、言わざる、聞かざる」。

質問者C ああ、三猿……。

福家 たぶん庚申だと思えます。

質問者C 仏さんが……。

福家 青面金剛か、あれですよ、猿田彦。

質問者C 猿田彦？

福家 はい。神道系では猿田彦神になるのだとされています。それが今、庚申の「申」からの転化で、信仰ができて、庚申信仰というのもそういう意味では幅が広く、なかなか私もよく知らないところがたくさんありますけれども、おそらく、青面金剛でなければ猿田彦ではないかと思うのです。

質問者C ありがとうございます。

酒井 それでは、このあたりで終わらせていただきたいと思います。この種のシンポジウムは三回開いてきたのですが、四回目をどうするか、商大さんの決断次第ですが、今までの延長上で続けるか、ちょっと趣向を変えるか、もし、何かご意見がございましたら、参考までに出していただけたらと思います。アンケートにでもご希望のテーマを書きいただいて、大学のほうで参考にさせていただいたらと思います。

それでは、今日はお忙しい中、とりわけいろいろ面白いイベントが学内でも外でもありまして、お集まりにくいところを曲げておいでいただきまして、長時間ご清聴いただきましてありがとうございます。また、先生方にもお世話になりました。コーディネイトの不備不手際をお詫びいたします。(拍手)

司会 先生方、どうもありがとうございました。それでは、先ほど申し上げましたけれども、アンケートのほうをご協力よろしく願っています。どうもありがとうございました。

死するとなるべし、牛馬、猶身を惜む、況や人身をや、癩人猶命を惜む、何況壯人をや」

人身売買

閑吟集：人買舟は沖を漕ぐ とても売らるる身を ただ静かに漕げよ 船頭殿
 外国へ売られる人たち
 豊臣秀吉「大唐・南蛮・高麗へ日本人を売り遣し候事停止」、1587年

2. 説経節の世界

説経の譬喩譚部分を唱導し、仏縁を得せしめる→成神成仏

服部幸雄：宗教・生活・娯楽（芸能）が一体化した生活構造

江戸初期・寛永期に正本、唱導文学として発展、万治・寛文ころから説経浄瑠璃に変化
 信徳丸 河内国高安の里の信徳丸、「癩」に罹患、天王寺の引声堂の後堂の縁の下で餓死
 を覚悟でいる、そこへ許嫁の美貌乙姫が巡礼姿で信徳丸を探しにやってくる。乙姫が
 病の信徳丸をになって、袖乞いに出る

小栗判官 16世紀半ごろ成立か 藤沢の上人のすすめで熊野湯峯の湯へ、諸人・山伏の
 力で土車でたどりつく、照手と会う、一七日目があく、二七日腰が立ち、七七日満願
 山椒大夫 摂州東成郡生玉庄大坂天下一説経与七郎（信太純一：四天王寺で説いたか、
 阪口弘之：13～14世紀叡尊・忍性ら律宗僧の宗教活動がふまえられている）

陸奥、直江津、丹後、七条朱雀権現堂、天王寺を結ぶ、安寿と厨子王、土車「大夫を
 ばこの白洲に腰より下を掘り埋め、五人の子供に竹のこぎりにて首を引かせよ」「一引
 き引いて千僧供養、二引き引いては、万僧供養、百に余て六つのとき、首を前にぞ引
 き落とす」→森鷗外の作品に

「ミミヲキリ、ハナヲソグ」中世世界（紀州阿弋阿莊百姓片仮名書き言上状、1275年）

3. 江戸時代に生きる巡礼の祈り

1692年 紀州長尾村の足なえの者、杖2本で西国巡礼に出発、途中病気になり村送りで
 帰郷（正月中旬～8月8日）

1808年 伊勢安濃郡の孝女登勢「領下第一抜群之孝心」津藩から持地を与えられる。
 養父母ともに罹病「余りに病気のくるしさにそんじ付けるは、熊野本宮にては、かやう
 の病ひも全快いたしたる例（ためし）も聞およびければ熊野本宮…夫より西国順礼いた
 し度心願」

おわりに

多様な順礼のなかでの黙示(啓示、revelation)

順礼をささえる善根

現代文明を超える宗教の原点をさぐる

平成 19 年度大阪商業大学商業史博物館シンポジウム

「巡る祈りの文化—世界遺産にみる信仰・巡礼・芸能—」

信仰・巡礼・芸能

三重大学名誉教授

酒 井 一

はじめに

いま、世界と日本に求められるもの、世界文化遺産から引き継ぐべきもの
近代文明と各国の遺産（自然・文化）

1. 中世を生きる

「仏は常に在せども、現ならぬぞあはれなる。人の音せぬ暁に、仄かに夢に見え給ふ。」

「大峰行ふ聖こそ、あはれに尊きものはあれ、法華経誦する声はして、確かかの正体未だ
見えず」（梁塵秘抄）、「一身欲見仏 不自惜身命」

「宗教こそは、親鸞や聖フランシスや恵信尼や、およそこの地上において永遠に解放さ
れる条件とその見透しをもちえなかった全世界の封建的農奴にとって、自己とその世界
を領有するための唯一の科学であり、哲学であり、思想であり、真理であった」（服部之
総：親鸞ノート）

「今此三界皆是我有 其中衆生悉是吾子 而今此処多諸患難 唯我一人能為救護」（法華
経）「三界は火宅」「衆苦充滿」「常に生老病死の憂患あり」

災害・病気・貧困・飢饉・戦争

方丈記：世の中飢渴（けかつ）シテアサマシキ事侍リキ…、乞食路ノホトリニ多ク、ウ
レヘ悲シム声耳ニ満テリ…剩ツサヘ疫癘ウチ添ヒテ…路ノホトリナル頭、スベテ4万2
千3百余年ナリケル…ソノ首ノ見ユルゴトニ額ニ阿字ヲ書キテ…ヲビタタシク大地震
振ルコト侍リキ、ソノサマ世ノ常ナラズ、山ハクツレテ河ヲウヅミ、海ハカタブキテ陸
地ヲヒタセリ」 1182～85年

立正安国論：天変地夭飢饉疫癘遍満天下広迸地上 1260年

ハンセン病と救済 「病氣と宗教の切っても切れない結びつき」（立川昭二）

キリスト教新約聖書ルカ伝 16章「ラザロと金持」

「現世には白癩、黒癩の身を受け、後世には無間地獄の底に墮ち」（播磨浄土寺文書、1192
年）

西大寺叡尊、一遍、日蓮ら鎌倉仏教の僧

日蓮「世間に人の恐るる者は、火災（ほのほ）の中と刀劍（つるぎ）の影と、此身の

平成19年度大阪商業大学商業史博物館シンポジウム

「巡る祈りの文化—世界遺産にみる信仰・巡礼・芸能—」

宗教の身体性と根源性

天台寺門宗教学部長・総本山三井寺執事
福家俊彦

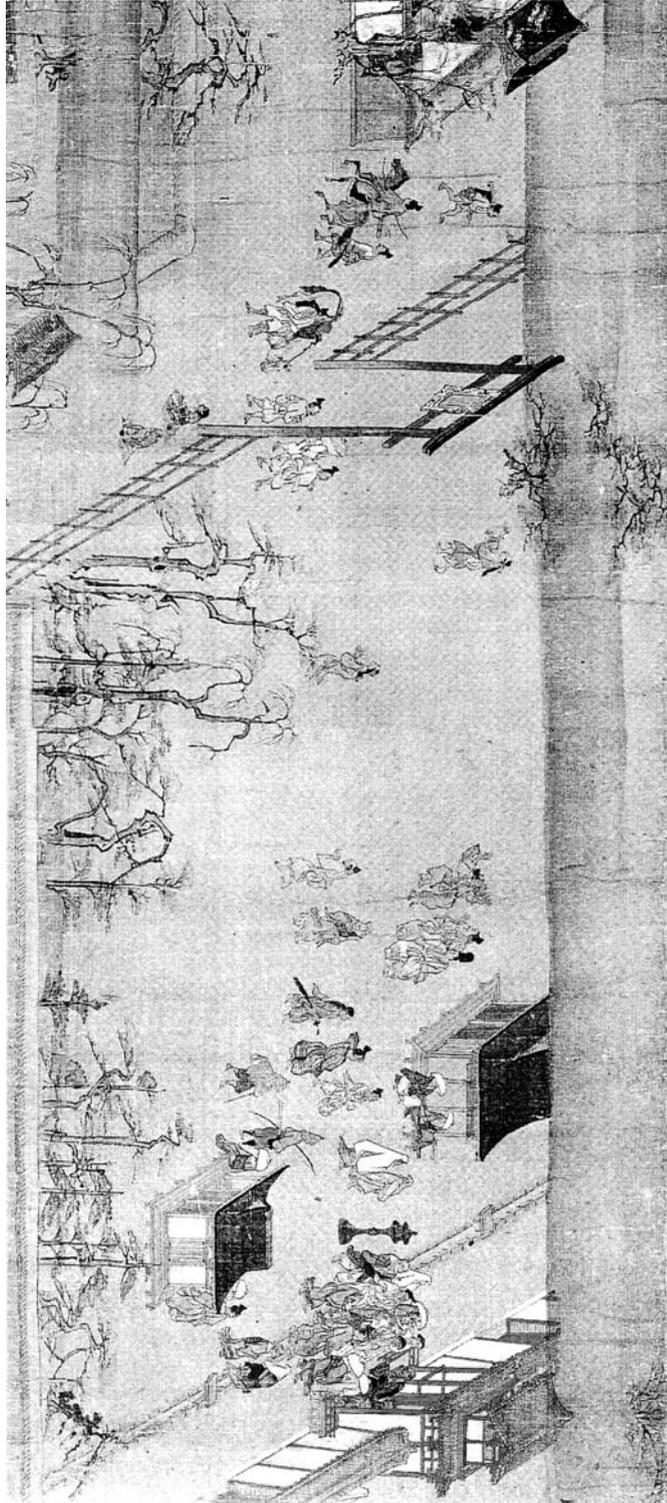
日本の宗教史を顧みるとき、いまひとつ釈然としないのは、思想史あるいは仏教史学（経論疏、祖師中心の教義史や教学史）と現実の庶民信仰史との関係が、十分に構造化されて説明がなされていない点である。各時代の信仰のかたちを解明するには、両者の歴史的布置を考慮し、両者に架け橋を架ける作業が必要となる。

こうした問題意識のもと、巡礼、芸能など庶民信仰からのアプローチとして、ここでは「修験道」と「三井寺別所」に着目したい。

先ず、庶民信仰に大きな比重を占めてきた「修験道」について、本山派修験（三井寺派修験）による大峰奥駈修行、とくに実際の修行者の心性を中心に紹介する。

次に、独特の宗教文化圏を形成していた「三井寺別所」について報告する。ここでは、説経節（関蟬丸神社と三井寺流）など様々な職能、階層の人々が集まり、また時衆、連歌師、一向宗、庚申信仰と大津絵といった多様な要素が関連し、庶民信仰の垣塙のごとき様相を呈していた。この「三井寺別所」の歴史的役割を顧慮することなしに三井寺の歴史を語ることは出来ないし、三井寺に限らず他所の別所も含めて「別所」の存在様態を把握し直すことは、旧仏教に対する鎌倉新仏教の再検討をも促し、ひいては日本の宗教史における構造化の問題に一つの視点を提供すると考えられる。

さらには、この作業を通じ、「なぜ人間には宗教が必要なのか」という根源的な問いと宗教的真理が宿る「身体」についての観念、総じて「人間の有限性」の問題を日本の宗教信仰史に沿って跡づけることが課題となる。



一遍上人絵伝に描かれた四天王寺西門付近

融通念仏すゝむる聖、いかに念仏をばあしくすゝめらるゝぞ。御房のすゝめによりて、一切衆生はじめて往生すべきにあらず。阿弥陀仏の十劫正覚に、一切衆生は南無阿弥陀仏と必定するところ也。信不信をえらばず、浄不浄をきらわず、その札をくばるべし

・和泉式部と熊野権現の歌問答

和泉式部「晴れやらぬ 身のうき雲の たなびきて 月のさはりと
なるぞかなしき」

熊野権現「もろともに 塵にまじはる 神なれば 月のさはりも な
にかくるしき」 (『風雅和歌集』)

・説経『小栗判官』

湯の峯につけ給へと、ぬいさらぬいと引く程に、堺の浜を引き過ぎて、和泉の国に車つく。急ぐに程なく紀の国に聞へたる。かぶろの宿につきにけり、是より車にてはかなはじとて、籠に入れ負い、程なく湯の峯に御出ありて、小栗を介錯し給ふ。一七日お入りあれば、耳も聞へ、眼も見ゆる。三七日と申すには、本の小栗と成り給ふ。小栗夢のさめたる心地にて、是はまさしく熊野の三つの御山と覺へたり。ありがたやと伏し拝み給ふ

・説経『しんとく丸』

乙姫かつばと起き給ひ、あらありがたの御夢想や、と御前三度伏し拝み、御下向なさるれば、一の階に鳥帯のありけるを、たばかりて下向申し、はにふの小屋に下向あり、しんとく丸をひたて、上から下、下から上へ、せんさいなれ、と三度撫でさせ給へば、百卅五本の釘はらりと抜け、もとのしんとく丸にお成りある

四、おわりに

- ・四天王寺と熊野の同質性
- ・中世における庶民信仰

〈参考文献〉

- 北川 央「浄土信仰の聖地―四天王寺、そして遥かなる熊野」
(『大阪人』五八―九)
- 北川 央編著『おおさか図像学―近世の庶民生活』(東方出版)
- 北川 央・有栖川有栖「対談―上町台地の海と水を語る―」
(『―歴史の魅力あふれる大阪のふるさと―上町台地を歩く』)

平成十九年度大阪商業大学商業史博物館シンポジウム

「巡る祈りの文化―世界遺産にみる信仰・巡礼・芸能―」

四天王寺と熊野―熊野街道が結んだ二つの聖地―

大阪城天守閣研究副主幹 北川 央

一、はじめに

- ・「紀伊山地の霊場と参詣道」の世界遺産登録と私
- ・熊野街道は唱導文学の宝庫

二、四天王寺の信仰

- ・聖徳太子の創建
- ・浄土信仰の隆盛と「日想観」
- ・藤原家隆の「夕陽庵」への隠棲

「契りあれば 難波の里に 宿り来て 波の入日を 拝みつるかな」

〔古今著聞集〕

- ・『一遍上人絵伝』に描かれた四天王寺
- ・四天王寺西門の石鳥居に掲げられた扁額
- ・説経『さんせう太夫』

あらいたわしや、づし王殿は石の鳥居に取りついて、えいやつと言うて御立ちあれば、御太子の御はからいやら、またづし王殿の御果報やら、腰が立たせ給いける

- ・浄瑠璃『撰州合邦辻』

西門石の鳥居脇に建立の閻魔王、一銭二銭の多少によらずお志はござりませぬがなく。たった一文か二文で、閻魔様に近付きになって置くは徳なもの……当極楽土とあるからは、この天王寺は直に極楽、……実方があれば敵役もある。鬼があればこそ仏もある。畢竟地獄は極楽の outlet。其 outlet の番頭はこのわろ。番頭の気に入って置かずば、本家の極楽へ何と出入はなるまいかの

三、熊野の信仰

- ・熊野詣の目的
- ・『一遍上人絵伝』に記された「熊野成道」

3) 大峰山系地域整備計画の問題点

- a 2004（平成16）年7月、大峰山脈は「紀伊山地の霊場と参詣道」「参詣道」の構成要素として世界文化遺産に登録された
- b 「世界文化遺産登録を契機として登山等による利用者の増加が予想されるため」として奈良県が「大峰山系環境共生推進計画」をまとめた。これを受けて、2006（平成18）年6月、近畿地方環境事務所は今後の整備計画として「吉野熊野国立公園 大峰山系地域整備基本計画」をまとめた。
- c 問題点→大峰山脈への登山者の誘致と利用優先の整備。不必要な整備が含まれている（例えば、弥山への登山口にキャンプ場や休憩所設置、七面山線歩道に駐車場や休憩所設置、弥山山頂に大きなトイレ設置など）
- d 不必要な整備計画に多額の税金をつぎ込むことよりも、立ち枯れに対する抜本的な保護管理計画をすみやかに実施することが求められている

参考：ホームページ「エコねっと奈良」で、奥吉野の自然保護等に関して取り上げていますので、ご参照ください。<http://www1.kcn.ne.jp/~kmae>

立ち枯れる世界遺産の森・大峰山脈

前 圭一 (大阪経済法科大学)

はじめに—私と大峰山脈とのかかわり

1973年から登山を始める。社会人の登山団体である奈良勤労者山岳連盟に所属。登山を通じて、自然保護活動に参加

1) 大峰山脈の自然破壊と保護の取り組み

戦前 1936 (昭和11)年、吉野熊野国立公園の指定 (*岸田日出男氏の尽力)

戦前・戦後、原生林の伐採進む

戦後 稜線部を除いて、大規模な伐採と人工林の植林

1970年代、白川又林道の建設 (奈良県) 反対運動

1990年代後半から八経ヶ岳周辺に鹿の防護柵を設ける

2) 立ち枯れの現状

a 最近、大峰山脈の最高峰・八経ヶ岳を中心とした一帯で深刻な立ち枯れが目立つ

b 奈良県勤労者山岳連盟は1998年から2006年まで立ち枯れ調査を実施してきた。(*調査報告書を2004年9月に発行)

c 立ち枯れの特徴

1. 針葉樹シラビソ・モミ・トウヒの集中的な立ち枯れ (*八経ヶ岳のシラビソの純林は天然記念物に指定されている)

2. オオヤマレンゲがほぼ全滅状態 (*八経ヶ岳一帯のオオヤマレンゲは天然記念物に指定されている)

3. ブナの衰退・大峰山脈の稜線は疎林状態に

4. 鹿による針葉樹の剥皮、オオヤマレンゲの食害

d 立ち枯れの原因

原因は確定していない

「酸性雨・霧を主原因として、回復を不可能にする鹿の剥皮が衰退に拍車をかけている」「周辺地域の原生林の伐採や地球温暖化の影響も無視しえない」(奈良県勤労者山岳連盟調査報告書)

